1993-20 1/11

雑誌を読む 7月

「論じない政治」の行方

森まゆみさん　論壇の「壇」を降りて、面白い、生き生きしたものをできるだけ拾えたらなと思います。論だけでなく、現象として面白いものも取りあげたいですね。

田中明彦さん　論壇というと、その権威主義的響きのゆえに、逆に論じることが圧殺される面があるという感じがします。できるだけ論じることを重視したい。現象として面白いにもかかわらず論じられてないものは何か、ということも見たいと思います。

橋爪大三郎さん　月刊誌とかつまらないんですが、テレビにも新聞にも載らないことをきちんと述べる場所はほかにない。その中に読む価値があって面白いものもあるはずです。

☆　☆

田中　物事を論じるということはあんまり流行りじゃないですね。今の政治改革に結び付ければ、論じるのがいやなカルチャーの所で、一体いかなる政治が可能なのか、ということです。石川好さんの「日本人の冒険」（月刊ASAHI）が、「日本人が言葉をなくした」と言ってる。これと響き合うものが、小沢一郎さんの「今、何をすべきなのか」（文藝春秋）で、議論をしなければいけないのに、私のように明確な結論を求め、責任の所在をはっきりさせようとする政治家は『危険』に見えて仕方がない」と言ってる。

立花隆さんが田中支配について書いていて（文藝春秋「遅すぎた終焉」）、面白いんだけど、議論が屈折してると思う。一方で田中角栄はいかにひどいかと言って、「人徳の無さが政治家としての小沢の一番の弱みである」と、角栄の魅力が小沢には継承されていないという。立花隆のような人もやっぱりこういう人は危険だと言ってる。「論じる」のは嫌い、というのとつながってると思います。

田中　明彦さん　一九五四年、埼玉県生まれ。東京大学東洋文化研究所助教授（国際関係論）。「世界システム」など。

「小沢悪玉論」のズレ

橋爪　今回一番論じるに値するのは立花さんの「小沢悪玉論」。一つの見方だと思いましたが、ちょっとずれてるんじゃないかと思う。田中型の金権腐敗政治がダメだ、小沢一郎はその再生産としてもできそこないだ、いまさら政治改革はおこがましい、自分の金権腐敗体質をきっちり釈明してからやれと言ってるわけだけど、僕はそうじゃないと思う。田中政治と明らかに違った新しい手法が出ている。例えば小沢さんが羽田さんとくっついてるのは、派閥政治の力の原則から言えば説明できない。最終的には党を飛び出した。

森　「金脈と人脈」以来の論点で、目新しい立花さんならではの切り口は無いんですね。それと、いろいろな雑誌で論者が重なっていて、政治についてわれわれはこれだけのメンバーしか持っていないのかと思いました。

森　まゆみさん　一九五四年、東京都生まれ。地域誌「谷中根津千駄木」編集人。「小さな雑誌で町づくり」など。

田中　小沢さんが言ってるのは、国際社会において日本を率いるリーダーシップをどうやってこの政治体制の中で作るか、ということで、これに対して正面からの議論がない。これに対しては二通りの答え方があって、一つは今の日本には国際社会でリーダーシップをとるようなリーダーは必要ない、決断、決断というような人は危険だという議論。もう一つは野田宣雄さんの「政界再編は本当に日本を変えるか」（諸君！）で、国際社会は大変だから国益を重視しなければならない、首相が大事だと言ってる。ただしどうやってそういう首相を作るかについては精神論しかない。立花さんのも、そこの論点が出てない。

橋爪　立花さんは田中角栄の構造汚職を指摘した。構造汚職なら構造を変えないと、政治資金規正法だけじゃだめなんですよ。どこを変えれば次の政治システムができるかまで行かないと革新きれいごと路線で終わっちゃう。

もう一回選挙を

田中　石川好さんは、論ずる必要がない、日本では大きな政策は終わった。政治に大きな決断のいることはなくなったと言ってる。彼はそれを怒っているんだけど。小沢さん、野田さんと違う議論が、あえて言えばここにある。

森　石川さんのいう現実は私の見ている東京の現実とは違うんです。例えば生活保護が荒川区では一九％あって、それを切り捨てて一〇％までにしたために自殺者が出たとか。

橋爪　日本に政治課題がないという議論にはとてもくみせません。

田中　山口二郎さんの議論（月刊ASAHI）は全面的には賛成しがたい所もあるんですが、彼の言うように選挙後の連合政権の課題が選挙制度改革と腐敗防止という、それだけをやって、できる限り速やかにもう一回選挙をやるのが一番いいと思う。

橋爪　今回、どういう政権ができるとしても、国会の中で多数工作をした結果ですから、国民は信任を与えていない。もう一回選挙をするまでは正統な政権じゃない。

橋爪　大三郎さん　一九四八年、神奈川県生まれ。東京工業大学工学部助教授（社会学）。「冒険としての社会科学」など。

森　山口さんは社会党のブレーンと言われている人でしょう。随分社会党を見放している感じでしたね。

橋爪　浅羽論文（宝島30「あえて今、棄権して何が悪い!という理屈のこね方」）ですが、彼の言ってることは半分正しい。しかし、選挙民として政治的な意思決定に参画しているという連帯責任の考え方がない。

田中　民主主義は一つのイデオロギーであるというのは正しいが、政治システムの中で人間は生きている。最終的にあなたはホッブズの各人の各人に対する戦争状態を引き受ける気がありますか、ということになる。単なる通念反発型論文にとどまっている。

森　でも今の若い人には結構受け入れられそうな気がします。

田中　ハンチントンの「文明の衝突」（中央公論）は、かなり間違っていると思うんですが、重要な論文だと思います。冷戦が終わった国際社会の基本的な対立軸は文明で、イスラム勢力を儒教圏が支持しそれが西欧と対立している、その西欧に日本は今の所くっついている、と。その西欧文明が絶対に負けることがあってはならない、と主張している。

橋爪　アメリカは楽ですね。普遍的な価値があって、それを信じない文明があるという論法で納得すれば終わり。我々は普遍的な価値は外国から教えられたことになってますから、微妙なコンプレックスが生まれてしまう。

自由帳

橋を架ける試み

「夫殺し」という台湾の話題作がようやく翻訳された。舞台は一九〇〇年代の鹿港。孤児の林市は陳江水にむりやり嫁に行かされる。貧困と差別のなかで夫の凌辱にたえかね、妻は夫を殺す。作者李昂の来日時のインタビュー（『宝島30』。聞き手・上野千鶴子）は強烈だった。

台湾では少し前まで、セックスと政治はタブーであり、それを描いた作品と作者をゴッチャにして、個人攻撃もなされていた、と李昂は語る。

「もし男の人がいなかったら女性というのはどういう生き物であるかということです。わたしたちの行為、考えかた、あるいは希望というのは……みな男の人が考えた概念、男の人が想定したものであるから」という作者は、女性が成熟し、女性の文学があるレベルに達したとき、男性には理解できなくなるのではないか、と見通す。

今月は日本でも、男と女の間の深い河を女たちが語った。島村麻里「SEXは究極の異文化体験だ」（婦人公論）は若手のあっけらかんさで。稲葉真弓「男にはわからぬ女の『性』」（新潮45）は作家らしい洞察力で。「あなたの手、あなたの言葉、あなたのペニス、あなたの体のすべてを、優越を得るための武器や自己満足やプライドを保つための器官ではなく、遠い未来……、女にとって唯一無二の自分の親友のようなものであったと思わせてほしいと」。これは話題の「マディソン郡の橋」のたった四日の恋に触発された、稲葉の美しく悲痛な叫びだ。

その同じ小説を佐藤信行「『マディソン郡の橋』の何にアメリカ人は涙したか」（中央公論）はこう読む。アメリカの経済衰退も犯罪、麻薬、未婚の母の増加もすべて家族の崩壊に端を発している。この「ありふれた悲恋物語」は、恋に落ちても家庭を捨てなかった女主人公の「自己犠牲」「責任感」が、「道徳小説」として感動を呼んでいるのだと。

李昂ではないが、河は深い。それでも「良い経験と言葉」で橋を架けなくては、いや、架けたいではないか。

（森まゆみ）

◆読む・ガイド◆

（月刊誌はすべて８月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
日本人の冒険――何を、誰を、えらぶのか	石川好　月刊ASAHI	言葉をなくし「政治」を必要としない国、なのか
遅すぎた終焉　田中型政治は終った	立花隆　文藝春秋	田中政治の後継者、小沢、羽田氏は到底信用できない
今、何をすべきなのか	小沢一郎　文藝春秋	冷戦で手抜きしてきた国家としての原則を確立せよ
政界再編は本当に日本を変えるか	野田宣雄　諸君！	日本政治の最大の課題は安全保障と国益のはずだ
55年から95年へ―政党政治のパラダイムシフト	山口二郎　月刊ASAHI	政党再編は２段階で。社会党は脱皮しないと終わりだ
あえて今、棄権して何が悪い！という理屈のこね方	浅羽通明　宝島30	学級会の優等生的なデモクラシー教を妄信するな
文明の衝突	S・ハンチントン　中央公論	西欧文明は敵対的な非西欧文明にいかに対処すべきか
共同報告・改革論への警告	高畠通敏、暉峻淑子他　世界	「改革」の呪文を廃す、民主主義再興こそ政治改革
「わが日本新党」との訣別	松崎哲久　中央公論	日本新党は細川私党。政策も戦略もなく失速は必至だ
現代思想時評・イデオロギー復活のすすめ	山崎正和　VOICE	民族、宗教などの扇情的力より合理的イデオロギーを
移民される側の論理	渡部昇一　諸君！	日本人は日本列島のインディアンだと考えたらどうだ
皇室の危機―「菊のカーテン」の内側からの証言	大内糺（宮内庁勤務・仮名）宝島30	美智子さまは「自他ともに認める宮中の最高実力者」
差別表現狩りをしても差別がなくならない理由	池田清彦　宝島30	抗議する方もすぐ謝る方もどちらも変だなと思う人へ
何でこれが「女性差別」なのか	SPA！ 7／14	差別と表現について考える時、こんなスタイルもある
Ｊリーグの人・モノ・金	東宮哲哉、間紘一　THIS IS 読売	オーソドックスな解説を読みたい人はどうぞ
対談・Ｊリーグ、身も心もラテンでオーレ！	ナンシー関、大月隆寛　CREA	選手や観客の精神的なものすべてがラテン直輸入
汚されたスポーツ　Ｊリーグもか？	玉木正之　新潮45	何者にも利用されないスポーツ組織、の理念はどこへ
ぼくが引退しないわけ	ジャイアント馬場　現代	55歳にして現役レスラーこの道一筋に後光がさす
特集・有名になりたい「最も光を浴びた日陰者」	宅八郎　思想の科学	オタクの王者が語る有名人の自意識
わが名は平成大食王	風間博正　文藝春秋	学生食堂で6540円分をぺろり、大食い能力最高潮

雑誌を読む　8月

田中明彦さん　新政権論ですが、政治システム、政治改革の方向性と、政策についてと、二つの軸が議論の中心という感じです。

政治システムについては、北岡伸一さんが中央公論の「カルテル政治から競争の政治へ」で、政治家は権力追求の亡者であって、別にそれはそれでいい、それをどうやって闘わせてよりよい政治を作っていくかが大事で、そこに素朴な道義論を持ち込むのは好ましくないと言っている。議論で面白いのは、小沢一郎氏を批判するにしても、金丸的手法をやったかどうかというよりは、都知事選でどうして勝てもしない人を候補者にして失敗したかとか、突然ソ連に行ってできもしない交渉をやったのはどうしたことか、とか、政策面で議論すべきで、手法面については本質的でないと言う。他の小沢批判とは違う視点だと思います。

政策については、まだまだ政界再編が続いて政策を基準にして分かれるとすれば、じゃ何が基準になるのかという議論が出始めている。その点では堺屋太一さんの「戦後政治の『終りの終り』」(VOICE)がありました。

橋爪大三郎さん　これはとてもクリアで、ぼくも感心して読みました。

田中　自由経済か規制強化か、つまり小さな政府か大きな政府かというのと、国際協調か一国主義かという分け方です。潮の山口二郎さんの「『九五年体制』の構築に向けて」も、小さな政府か大きな政府かと、大国主義志向かシビリアン国家かという分け方ですね。

福田和也さんの文藝春秋の「新政権に糾す」の中の小論文「めざすべきは大国か小国か」も、国際協調か孤立主義か、の選択を強調している。「国際協調か孤立主義か」という分け方と、「大国志向かシビリアン国家か」という分け方は、実は異なる分け方で、これから大きな論争のたねになると思う。

橋爪　今回の政変の意味は、保守・革新というベクトルが完全に時代遅れになった、この枠では何も決まらないんだということだと思います。そこで、新しい座標軸の上に、日本国民の間の利害とか構想とかを配置し直す。政界の再編もその上にあると思うんです。大きな政府と小さな政府、国際協調、一国主義というものを取り出して政治の図柄を描こうという堺屋さんのはタイムリーだと思うんです。問題は、現在ある政党が、その座標軸に合うように自分たちの政策を作っているわけじゃないことです。国民も政党もじっくり議論して、再編成されなくちゃいけない。

政治の新しい座標軸は？

基本的には宮廷革命

森まゆみさん　私なんか市民の立場で丸山真男さん流にいうと〃いやいやながらの政治活動〃をやっていると、政策論争がないという気がします。基本的には宮廷革命で、市民革命ではないところで、ホントにわかりにくい中で小沢さんが主軸になって、政権が作られてしまった。これからますますわからなくなるんじゃないかと思う。それに対して論壇が妙に現実主義的な気がする。私は世界の篠原一さんの「政治的移行期の可能性と不安」が面白かったんです。市民派の方ですが、日本新党の中の一種の民権派、リベラリストにある程度の期待を持っていて、多党制は必ずしも不安定ではないと。しかし護憲とか平和とか生活者重視とかを手放さない政治勢力に期待すると言っている。

田中　宮廷政変劇にしかならなかったのは中選挙区制だからだという面がある。国民は決定的判断は下さない。いっぱい小グループがあって、連立政権を作ろうとしたら、グチャグチャやるしかない。立花隆さんが、小沢さんの密室型政治が行われて、相も変わらずだというけれども、そういう構造だから密室型にならざるを得ない。連合政権を作るというのは交渉ですから。

橋爪　細川政権は世論調査で見ると断トツの支持率です。特定の政策や何かが支持されているわけではなくて、非常にファジーな連立内閣ということに支持が集まっているわけです。その支持の中身は今までの自民党の金権腐敗政治に比べ、クリーンでよろしいということだと思います。

森　佐々木毅さんがいう政治的イノセンス(純潔さ)ということですね。

政治風土は未熟

橋爪　佐々木さんの論文「政権党の意味を問う」(THIS IS 読売)は感心して読みましたが、政治的イノセンスで支持が集まるという政治風土は極めて未熟な政治風土ですよ。自民党政治に対して、新しい別の選択肢に支持を与えているわけではない。まあ新党もいいじゃないかということで多党連立型になると、今言った問題が出てくる。小沢さんが功労者であるにもかかわらず、ネゴシエーションばっかりやっているから排除する。代わりに羽田さんであったり、細川さんになっていく。これを乗り越えないと、本格的な国際協調か孤立主義かなどの政策論争までなかなか行かないと思う。

森　国際協調が消費者重視だというのは、食物を安く食べられるから消費者が喜ぶという程度のものですかね。

田中　消費者優先をはっきり割り切っているのは福田和也さんのもので、コメはもちろん、貿易を全面的に自由化しなければならない、金融行政も自由化して、つぶれる銀行はそのままつぶし、ということです。これを消費者優先だと思うかどうか。

森　私は思いませんね。もう一つ環境というファクターを入れると、農業の自立性とか、国土保全機能がありますよね。ポストハーベストや多品種生産と栄養の問題もある。

田中　その辺のところを議論しなければならない。黒字に象徴される日本の行動パターンが、全体として日本人の生活水準を上げるためによその国の生活水準を著しく下げているということがあるわけです。こちらの生活水準はそれほど下げずに、向こう側の水準を上げる方法はないかということですね。

橋爪　そこで細川さんがどういうことをするかということですが、江藤淳さんの「新宰相論」(文藝春秋)を読むと、江藤さんは細川さんが嫌いなんですね。県知事は孤立主義者で国際協調性がない。こういう人が国家をリードすると、議会政治を無視して直接民主主義型の全体主義者になる、と。一方、別な角度の論文も今月はあって、細川さんはむしろ開放派。中央の許認可政治を打破して日本を国際的に開いていくんだ、と。どっちなのかが、まだよくわからない。

……

たなか・あきひこ　東大助教授(国際関係論)▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大助教授(社会学)▽もり・まゆみ　地域誌編集者

左から森まゆみさん、田中明彦さん、橋爪大三郎さん

自由帳

「週刊金曜日」は期待できるか

改革を掲げる細川連立政権がスタートした。ゼネコン汚職も摘発された。日本社会の満身にはびこる談合体質をどう克服するか。これはわれわれの緊急課題である。

マスコミも例外ではあるまい。省庁ごとの記者クラブ制度や皇室報道の「自粛」は、どう考えても談合そのものだ。

そんな現状に風穴を開けようと、筑紫哲也、本多勝一氏らが「週刊金曜日」を十一月に創刊するという。先月、そのテスト版「月刊金曜日」が発売になった。さっそく読んでみた。

一年分を予約した読者にだけ、郵便で届ける――週刊誌としては、ここがまず変わっている。広告に頼らず、経済的な自立をはかるためだという。予約はすでに四万三千人を超え、発刊のメドも立ったらしい。

五人の編集委員がそろって文章を寄せているほか、大西巨人、三浦和義、森村誠一などとりどりの顔ぶれが並ぶ。たった六八ページで五百円はちと高いが、投書を巻頭に配したり、「市民運動案内板」を設けたり、たしかにひと味違った誌面づくりを目指してはいる。

編集後記にあるように「執筆陣の強化」が必要である。「既成マスコミ内部にいるジャーナリストたち」や「一般企業の社員や公務員の方々」に寄稿(内部告発)を勧めているのが目を引いた。寄稿の秘密を固く守り、相応の稿料を支払うなら、原稿もまずまず集まるだろう。だがそんな駆け込み寺的なメディアが一つ増えたとして、それで日本のジャーナリズムがどこまで改革できよう。

編集者や読者の「市民的良識」を満足させる雑誌ができても、それだけのこと。問題の根本は、大新聞の記者たちがサラリーマンでしかないことなのだ。組織原則を改め、記者たちを筆一本で勝負させないと、ジャーナリズムは健全にならない。「本誌は専属ライターを擁するまでにはまだ成長していません」などと言わず、それをどう育てるのか、きちんとした方向を打ち出すことを期待したい。

(橋爪大三郎)

◆読む・ガイド◆

(月刊誌はすべて9月号)

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
カルテル政治から競争の政治へ	北岡伸一　中央公論	最大の課題は経済的競争力にふさわしい政治システム
戦後政治の「終りの終り」	堺屋太一　VOICE	官僚主導型啓蒙主義の継続は危険だ
政権党の意味を問う	佐々木毅　THIS IS 読売	政治的イノセンス克服と有権者の成熟が必要だ
政治的移行期の可能性と不安	篠原一　世界	穏健多党制への展望、たしかな政策を持った政治勢力
特集　新政権に糾す	香山健一、福田和也他　文藝春秋	何が政界再編か、めざすべきは大国か小国か……
官僚制の民主化をどう進めるか	山口二郎　エコノミスト 8/17・24	新政権の課題は与党と官僚制の関係の変革だ
政治はこけても日本はこけず―官僚匿名座談会	文藝春秋	新党はデマゴーグか？　霞が関の不安と自信
新宰相論――あるいは日本の叡智について	江藤淳　文藝春秋	今必要なのは未来を見通す構想力を持った政治家だ
小沢一郎の大罪	立花隆　週刊現代8/21・28	国民不在の密室政治で独裁政権が生まれる
日本の政治はアントニオ猪木状況だ	松原隆一郎　宝島30	対決のふりをする政治はプロレスを超えられるか
社会党落選議員座談会　われわれも分裂すべきだった	仙谷由人他　月刊Asahi	選挙では社会党総体が否定された、と思う
日本共産党の目的は何だ	ビートたけし　新潮45	共産党には生き残ってほしい。多くはいらないけど
日本の孤立が見えてきた	田中直毅　エコノミスト 8/17・24	中国でバブルが崩壊した時に日本はアジアで孤立する
アジアにおける軍拡競争の行方	M・クレア　中央公論	アジアは21世紀の「火薬庫」になりかねない
「戦後」への確かな絶縁―ドイツが先か、日本が先か	西尾幹二　諸君！	軍事神経症を抱えたまま異質な者に直接接触する危険
日本の激動とパクス・アメリカーナの終焉	福田和也　正論	米国の覇権の終焉、近代世界システム全体の機能不全
ぼくらの「純愛」ごっこ・戦後民主主義と恋愛不能世代	佐藤健志　VOICE	「和気あいあい」でまともな恋愛ができるわけがない
近代日本の異能・異才　実業家100人	山口昌男編　月刊Asahi	21世紀を面白くするため、おじいさんたちに学ぼう
近頃マンガがつまらない！	SPA！8/11・18	ファミコンに勝てる作品を生み出せなければ衰退する
面白い雑誌・役に立つ雑誌	ダカーポ　9/1	政界ではないが雑誌界にも新しい風が吹き始めている

1993-20-3/11

雑誌を読む　9月

「侵略と謝罪」を考える

橋爪大三郎さん　細川首相の侵略戦争と謝罪をめぐる発言について話したいと思います。細川首相は最初に記者会見で質問に答え、次は終戦記念日のあいさつでアジアの戦争被害者に哀悼の意を表して一歩踏み込んだとみられたのですが、保守勢力や自民党などから総スカンを食らい、所信表明演説ではトーンダウンした。これに対して、国際感覚がなくてあきれた、全然外交がわかっていない、個人の考えで言っては困るなどの批判があった。一方、護憲派などから、遅まきながらよくやったという議論があり、評価は真っ二つに分かれています。

首相発言に評価二分

田中明彦さん　浅井基文さんの「細川内閣は『侵略』の事実をはっきり認めよ」（エコノミスト9/7）と小堀桂一郎さんの「首相・外相　昭和二桁世代の『侵略戦争』論」（諸君!）が対極です。細川さんの対応について、小堀さんはおかしいといい、浅井さんは最終的にしりすぼみになったのは具合が悪い、という。しかし、私は、普段はあまり一致することが少ない人ですが、浅井さんの言っていることが大筋で正しいと思います。小堀さんの認識は著しく固定的で、十九世紀的な国際政治観にのっとっている。彼が批判してやまない欧米列強の十九世紀における基準でみれば、自衛戦争だといっているにすぎません。その認識は二十世紀後半のアジアでは十分現実主義的ではないと思います。

森　まゆみさん

橋爪　小堀さんは、細川首相が日教組の教育に洗脳された結果で、嘆かわしいといっています。さらに大東亜戦争は決して領土略取的野心を動機とする侵攻戦争ではなく、自衛戦争だったと言っている。彼がこう思うのは勝手ですが、もし彼の言う教育の問題を彼に当てはめるならば、彼自身を形作った教育があるはずで、そこをどれだけ突き抜けて相対化できるかというところに思想の生命がかかっているのに、自分のイデオロギーを神棚にあげて、ひとの教育をあざわらうのは困る。

森まゆみさん　私は佐々木毅さんが、「冷戦と自由主義の大義」の下で覆い隠されていた問題が出てきている、コンセンサスを求めるより大胆な論議をしていった方がいいんだと言ってる（「コンセンサス政治はいらない」Ｖｏｉｃｅ）のに共感しました。今までの政府答弁は揚げ足をとられたり、追い詰められて言わされる形だけで、すっきりした侵略戦争論はなかったんです。諸井薫さんは「けじめなき『けじめ論』を叱る」（文藝春秋）で、諸外国がとっくに忘れ去っていることを持ち出しているとか、「謝り好き」とか書いています。でも保育園や学校で、アジアの人と話をすると、決して忘れてはいないんです。高崎宗司さんのように今までこの問題で発言してきた人からも一定の評価があります（「戦争責任論、一歩前進だが」世界）。浅井さんの言う、スタンドプレーに終わらせないように注視していかなくてはならないという点が大事だと思いました。

橋爪　細川発言が政治的に成熟した発言だったかどうかは別の問題です。Ｖｏｉｃｅの日下公人さんと渡部昇一さんの対談などで、謝ったなら補償という実行行為が伴わなければならない、実行行為をするつもりもないのに口先で謝って済むと思っていたなら、政治家失格であるという趣旨の議論があります。確かに細川さんはどこまで考えて言っているのかファジーなところがある。だけど、謝罪しなければいいという論につながるのはおかしい。

田中　国外からの批判は二つの要素があって、補償を求めるものと、はっきりモノを言うのか言わないのかということがある。諸井さんが、外国では通用しないとか、西欧ではどうだと言うのは、事実認識がおかしい。

若い世代の義務・責任

橋爪　個人補償の問題では、従軍慰安婦問題や香港の軍票問題などがあります。条約で解決済みだという国際法的な議論は十分理解できますが、何かの枠組みを作って、条約などからこぼれ落ちる部分について、十分に手厚く対応をするプロジェクトを考えるべきだと思います。金額をいうのは難しいんですが、五年、十年で一兆円とか。きちんと謝り補償もするということ、前の世代の実行行為に対して責任を持つのが、若い世代の義務、責任です。

森　謝る問題が、すぐ補償だ、金を払えばいいという話になるのも、ちょっと危険だと思いますね。

橋爪　アメリカの日系人強制収容についてレーガン政権当時に謝罪が行われ、補償金が支払われました。この問題と似た構造があると思います。

橋爪大三郎さん

森　島田晴雄さんの「今こそ偽装民主主義を打ち壊せ」（ＴＨＩＳ　ＩＳ読売）は、一九九五年に全世界的に謝罪せよ、応分の参加をしていくために謝罪せよと言っています。謝罪が応分の参加をしていくために必要不可欠なステップだという論が、これから出てくるんじゃないでしょうか。

田中　島田さんの議論は、どちらかというと政治的プラスマイナスに基づいたものだと思います。道義論を欠いていて不純だ、という批判はありうるのですが、政策論としては、道義的に正しいことをやって政治的に得をするのであれば、なぜしないのかというのは、そうおかしな議論ではない。ただ、このような発言があまり強く出すぎて、国際社会の中で「真剣に謝っているんじゃなくて方便で言っている」という話になると、まずいことになります。

森　雑誌ではこういう議論がありますし、建前としては、私たち自身も謝らなければならない、と思うんですが、一般市民のレベルではそれほど論議になっているとは思えないですね。

田中　明彦さん

橋爪　中央公論の「太平洋共同体の構築に向けて」でマニングさんが言っているように、アジアはバラバラであり、過去の対立の決着がついていないから、不信が大きなコストになってはね返っていると思います。

田中　マニング論文は標準的で的確な指摘が多い。小堀さんや、諸井さんのような言い方で、いつまでも事実を直視できないと思われる態度を取っていくことが、アジアにおける日本の孤立を生むかもしれない。

橋爪　宮沢さんが月刊Ａｓａｈｉのインタビューに答えて、戦争で隣国のたくさんの人に迷惑をかけたことと、それが侵略戦争であることとは別だと言っています。それと、戦争責任とか戦後処理の話は、よほどうまく処理されないと、補償問題を再燃させかねないのでご注意くださいと細川さんに進言したと言ってます。もし、政治家が国際関係の処理をこの二つの発想からやるなら、国益に反すると思う。

田中　宮沢さんの発想は基本的に事務処理型、役人の発言です。もう一つ、宮沢さんは日本人に対して不信がありますね。成熟していない国民だから、あまり派手なことをやる指導者では大変だと。

森　「相変わらずあぶなっかしい国民ですな」はないですよね。

はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）▽**たなか・あきひこ**　東京大学助教授（国際関係論）▽**もり・まゆみ**　地域誌編集者

自由帳

乏しい対外政策論議

細川首相が国連で演説する。細川政権の最大の課題が「政治改革」なのだから、国連での発言や外交姿勢について、それほど議論が沸かないのは理解できる。筆者も、この前の選挙が新政権に与えた任務は「政治改革」なのだから、それをできるだけ早くやって総選挙をすべきだとの意見である。

しかし、雑誌メディアの議論に対外政策についての議論がこうも少ないのはなぜだろう。細川首相が、国連で演説することはわかっていたはずだし、安保理の常任理事国問題も含めた国連改革がテーマであることもわかっていたはずである。しかし、今月の総合雑誌の多くを見る限り、この問題を正面からとりあげた論考はまことに少ない。

問題は、国連についての対策のみではない。総じて対外政策についての論考が少ないのである。たしかに、国際情報は、増えている。アメリカ事情、中国事情、ロシア事情、アセアン事情を書いた論文はある。しかし、ここからは、それらの諸国に対し、日本がいかなる政策を取るべきかについての議論をほとんど読み取れない。

対外政策についての論争をしなくてすむほど、日本の国際環境は安泰なのだろうか。高坂正堯（「時流が生んだねじれ政治」ＴＨＩＳ．ＩＳ読売）がいうように、「冷戦時代にはアメリカとの関係を考え、それに必要な限りにおいて外交を積極化すればよかったのだが、冷戦後は、明白に自己主張をし、相当の役割を果たさない限り生きていくことができないという冷厳な事実に直面することになった」のだとすれば、事情解説にとどまらない政策論争が、必要不可欠なのである。

国連での日本の役割はどうするのか。対ロシア政策はどうするのか。ウルグアイ・ラウンドは？　日米包括経済協議は？　朝鮮半島政策は？　長期的な中国との関係は？　地球環境問題は？　（田中　明彦）

◆読む・ガイド◆

（「広告批評」以外の月刊誌はすべて10月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
細川内閣は「侵略」の事実をはっきり認めよ	浅井基文　エコノミスト9/7	スタンドプレーを排した真の謝罪と償いが必要だ
首相・外相　昭和二桁世代の「侵略戦争」論	小堀桂一郎　諸君！	不用意な発言、二人の受けた戦後教育を嘆ずる
けじめなき「けじめ論」を叱る	諸井薫　文藝春秋	ファジーな社会だからこそ「けじめ」を連呼する
いま一度、政界再編を	山口二郎　月刊Asahi	自民党の再分裂を促し新しいリベラルブロックを
今こそ偽装民主主義を打ち壊せ	島田晴雄　THIS IS 読売	自由貿易維持と国内構造改革、積極的平和主義を
「保守・リベラル・社民」三党体制の勧め	山口定　世界	社会党は「日本型リベラル」の新党設立に努力を
猶予の時代が終る時	中西輝政・水木楊（対談）　諸君！	緊急避難的な戦後体制の後は、自覚的選択が必要
太平洋共同体の構築に向けて	R・マニング　中央公論	米国にとりアジア・太平洋地域が決定的に重要だ
小沢流政治への危惧　宮沢喜一インタビュー	国正武重・石川真澄　月刊Asahi	権力が国論を左右しやすい状況で力の政治は心配
吉田茂における自主と独立	北岡伸一　中央公論	吉田茂は岸、池田、佐藤の歴代首相に何を伝えた
モンスター中国と統一朝鮮	フランシス・フクヤマ　正論	アジアは激変し、日米の戦略関係は依然として重要だ
理想こそが人を動かす　細川護煕インタビュー	島森路子、広告批評９月号	慎重さと無鉄砲さが絶妙なバランスで交じっていた
小沢一郎の研究　西郷になり切れなかった男	早坂茂三　文藝春秋	「状況」を作ることができるプロ、職人は小沢だけだ
小説一九九四年大動乱　それはデノミから始まった	黒河小太郎　中央公論	経済混乱と中国、北朝鮮の危機に細川政権はどうする
細川首相の公約はよし、あとは実行あるのみだ	プレストウィッツ　NEWSWEEK9/15	日本見直し論者の主張が受け入れられたのは当然だ
諫諍論―「皇室批判」のたしなみ	大原康男　諸君！	暴露や直言は困る、真に皇室を思うなら手順と礼節を
笑犬楼よりの眺望	筒井康隆　噂の真相	差別表現問題で「プッツン」した筆者が語る断筆理由
ゴーマニズム宣言	小林よしのり　ＳＰＡ！9/8	副題・自主規制というファシズム、筆者の怒りが爆発
「甦る家族」第１回「お父さんが悪かった」	加藤仁　現代	子どもたちの反乱に企業戦士の父が目覚める時が来る
徹底討論　尾崎豊は殉教者か!?	父親、吉本隆明、山下悦子　宝島30	スキャンダルまみれの表現者の再評価を父と共に語る

1993-20-4/11

雑誌を読む　10月

不況、どう乗り越えるか

橋爪大三郎さん　不況が深刻になっている中で、経済政策、景気対策についての論文が目につきます。野口悠紀雄さんの「一九四〇年体制を打破できるか」（月刊Asahi）は、不況について景気循環よりも構造問題を強調している。構造問題を突破して競争社会に移行すべきだという論旨です。大前研一さんの「新前川レポートはいらない」（同）は規制緩和などで住宅市場が活発になれば景気は上向くので、金融・財政政策、減税などはおかど違いだという意見です。この二つは感心して読みました。佐和隆光さんの「『長期不況』に病む日本経済の処方箋」（潮）は産業が空洞化し今後一層の雇用調整が進むから、日本経済は相当厳しいという内容。中谷巌さんの「緊急提言　平成大不況への処方箋」（THIS IS読売）は、先に所得税を十兆円減税し、後で消費税を一〇％に引き上げるカンフル注射で大不況を克服しようというものです。中谷さんは堺屋太一さんのグループの緊急提言（文藝春秋、VOICE）に参加しています。あと、竹内靖雄さんの「暴走できるかトノサマ政権」（THIS IS読売）は構造問題は殿様が蛮勇を振るってメチャメチャをやれというものですが、内容的にはピンときません。

全体として、構造問題に先に手をつけるのか、それとも従来型の政策や、大型減税で対応すべきなのかというところに論点の分岐があります。

森まゆみさん　堺屋グループの所得税減税と消費税増税という議論に対して、内需拡大にはつながらないという批判があります。私の実感から言えば、批判論の方が説得力がある。雇用など先行き不安があって貯蓄に回ってしまうと思います。消費税一〇％が抱き合わせになっていることについては、竹内さんが「サルだましの朝三暮四」と批判しているように小手先のごまかしだと思う。

規制緩和についても問題だと思う。内橋克人さんが「過剰期待の規制緩和」（東洋経済10・9）で「官僚機構の手にある権限は温存するが、市民社会から発する規制は逆に拡大強化する」のが世界的な潮流だと言っていますが、だれのための規制緩和なのかが大事。地価の高騰や環境の悪化を再びもたらすような規制緩和は危険です。

田中明彦さん　解熱剤を打たなければならないという人と、熱が出ている根本を治さなければならないし、今の発熱には解熱剤は効かないという人がいる。堺屋提言の人たちは解熱剤がいるといい、野口さんや大前さんは解熱剤は役に立たないという。私は今の日本の体力では解熱剤なしで野口さんや大前さんのいう構造改革はとてもできないと思う。景気が悪い時に大幅な規制緩和や構造改革をしたら、麻酔なしに手術をするようなもので、それ自体が強いショックになる。問題は、解熱剤が効かないだけでなく、かえって悪影響を与える場合。私は悪い影響はないと思うんですが。

森　税制を消費税中心、間接税重視の方に持って行こうという論議が多いのが気になりますが。

橋爪　所得税減税のあと消費税増税は「朝三暮四」だという批判は、当たらないと思う。中谷さんの言うように、一年で消費税が一〇％に上がる、つまり物価が七％上がるとなると、耐久消費財などは早く買っておこうとする。減税分が消費に回る割合は高いと思う。

森　何か、あやつるようですが。

田中　消費者をばかにしているというか、人間を低俗な動物と見るものだという道徳論はあると思いますが、ただ、今の景気は皆が何も買わなくなっているという問題があるわけです。

森　消費を増やすといっても何を買うんでしょうか。家も狭いし買うものがないような気がします。

田中　それは日本にとって深刻な問題になると思います。国内や先進工業諸国で売れるものがあまりなくなっているという、構造的傾向ですから。

橋爪　問題は住宅ですね。日本人が家を二軒持っても、面積が二倍になっても、家具から何から倍売れる。日本の住宅は所得に比べて貧しすぎます。

次の論点として消費税引き上げがあります。私は一〇％にする議論は大賛成ですが。

森　消費税が導入された当時は、消費税はすべての人に薄くかかるので不平等、所得税は累進課税で平等という論で消費税反対が多かったですね。確かにクロヨンとか、十五三とか今の直接税は不明朗だとは思いますが。

橋爪　今の消費税も大変不明朗です。それらをガラス張りに改善すべきだ。その上で、今の業種別不公平、累進税に伴う重税などを考えれば、やはり直接税ではなく、消費税中心にしなければならないと思います。

田中　中谷論文が指摘していますが、所得税は人間性を悪くさせる。これも経費だ、あれも経費だということで節税できる。サラリーマンにはできないことですが。

森　サラリーマンは会社が節税した部分で飲み食いなどをしてますよ。

田中　中谷論文では日本人全体が会社人間になっていると言っている。本来、会社が個人に給与として支払って個人が自分の裁量で消費すべきものが、全部会社持ちになっている。会社はその分を給料で払うべきで、社宅とか保養所はおかしな制度です。

橋爪　私は社宅なんか禁止すべきだという意見です。

森　消費税は高齢化社会の福祉の財源になるとか、はっきりしているなら負担する意味もあると思うんですが。はっきりしたビジョンを見せてもらわないと困ります。

橋爪　そのためにも構造改革を断固進めるべきだ。日本の規制緩和はどういう手続きで、だれがやるのかというプログラムがない。例えば、国会で特別の委員会を作って、その委員会で必要であると証明できた規制だけ存続させるというような手続きを作るのもいいと思う。

森　平岩会長の経団連が規制緩和の要求を出す。その後、細川政権が案を出して、平岩さんが政府の経済改革研究会の座長をして、そしてこういう論壇に出てくる人たちが、また同じようなメンバー。何かこの問題を論じる人が限られているような気がする。国民的な開かれた論議という前に、偉い人の、上からの議論、産業、大企業にとっての規制緩和という議論が出てきて、本当に生活者重視の規制緩和論にはなっていない気がする。

田中　それは、生活者、市民の側のひ弱さだと思います。経団連のいうものとは違う、こういうことをやらなければならない、という提案を出さないと論議にならないですね。

……………………

たなか・あきひこ　東大助教授（国際関係論）▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大助教授（社会学）▽もり・まゆみ　地域誌編集者

橋爪大三郎さん

森　まゆみさん

田中　明彦さん

自由帳

“伝説”の前で一考を

コカイン密輸容疑で逮捕された角川春樹氏への論評が出そろった。ただテレビ、週刊誌でさんざ見せられたあとなので“遅かりし由良之助”である。メディアが一つの物語を消費するのはなんと速いことか。「堕ちた英雄・角川春樹論」（芹沢俊介・正論）は「父と子のエディプスのドラマを社会現象的レベルまで拡張してみせた事件と解釈。「薬物への嗜好は春樹個人の家族から宗教への転成に同伴した」という論旨はつめが甘いが、「麻薬＝絶対悪という安全な地点からの非難は管理主義が歓迎するもの」というのはうなずける。

「宗教家・角川春樹の法難」（島田裕巳・宝島30）は、彼を「出版人・映画人・俳人以前に宗教家であった人物」として、その言動を分析し読みごたえがある。「流され王」日本武尊や須佐之男命など「うとまれ抑圧され差別されるもの」への関心を一貫して示しているとの指摘も興味深い。芹沢説とは逆に、「父との確執」はフィクションで、父はむしろ神ではなかったか、という。実業家としては挫折しても宗教家としては法難を経てよみがえる、という島田予言は当たりかも。獄中の角川春樹氏はたいしたダメージも受けたように見えず、淡々と俳句を作ってるもの。

文藝春秋は「第四の権力メディアの反省」という流れに沿った座談会「角川春樹の見た夢」で、田山力哉氏「日本映画を駄目にした男」、粕谷一希氏「センスは非凡だが文化として残るかは疑問」と否定的だ。

山田詠美氏「良識が常識」（新潮45）が角川事件後、「山田詠美もやってんじゃないの」といわれて困惑した話で一番面白く、やがてカナシかった。黒人男性と結婚している、基地のそばに住んでいる、角川から本を出している↓コカインのおこぼれ、といった興味本位の“良識”が反論しがたい“常識”に変わる怖さを描いている。

メディアが記号と記号をスパークし、わかりやすい“伝説”を送りつけてくるとき、それを消費するのではなく、しばし立ち止まり、疑ぐってかかりたい、と思う。

（森まゆみ）

◆読む・ガイド◆

（号名のない月刊誌はすべて11月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
景気対策緊急提言	堺屋太一他　文藝春秋／VOICE	10兆円減税と消費税率10％へのアップを時間差実施で
1940年体制を打破できるか	野口悠紀雄　月刊 Asahi	国家総動員体制以来の経済構造の打破こそが重要だ
「新前川レポート」はいらない	大前研一　月刊 Asahi	富の配分ではなく、富の創出能力を高めることが急務
「長期不況」に病む日本経済の処方箋	佐和隆光　潮	「産業空洞化」を避けるためソフト面の競争力強化を
「平成不況」脱出への処方箋	水谷研治　宝石	経済水準をいったん下げ次の発展のため努力すべきだ
緊急提言　平成大不況への処方箋	中谷巌　THIS IS 読売	「税制改革担保減税」は一石三鳥の効果を生む
世紀末不況と欲望の限界	佐伯啓思　諸君！	経済成長が文化生み精神をリードした時代は終わった
暴走できるかトノサマ政権	竹内靖雄　THIS IS 読売	封建制度にメスを入れ解体する暴走的改革に走れるか
クリントン「対日戦略」の深謀	竹中平蔵　現代	日米新政権のハネムーンは終わり新たな摩擦の季節に
座談会・スタジオには魔物が棲んでいる	田原総一朗、筑紫哲也他　中央公論	テレビを味方につけないと政治家は勝ち残れない
細川政権を生んだ二つの政治潮流	大嶽秀夫　エコノミスト 10・19	新保守における「小さい政府」「文化の時代」の結合
新生党が「単独与党」になる日	立花隆・国正武重　世界	今の選挙制度改革で、経世会政治の体質は変わらない
同盟が空洞化するとき	中西輝政　VOICE	日米中三国関係がもつ「こわさ」を十分自覚する必要
古くかつ新しい原則	北岡伸一　外交フォーラム10月号	現代における新たな国際協調へのビジョンは何か
ポスト鄧小平　なぜ江沢民で決まっているのか	朱建栄　中央公論	江沢民という選択は中国二千年の歴史的知恵だと思う
宗教家・角川春樹の法難	島田裕巳　宝島30	春樹氏は神にも似た偉大な父の幻影の重さに苦しんだ
クレヨンしんちゃん症候群	黒沼克史　文藝春秋	珍現象が続出。子供たちの情報選択はどうなっている
ブルセラ女子高生の告白	宮台真司　現代	彼女らの「平坦な世界認識」の背景には何がある
筒井康隆・文芸時評	筒井康隆　文藝冬季号	「断筆宣言」は自分との新たな戦いである
擬似神マイケル・ジャクソンの悲哀	草森紳一　広告批評10月号	現代に「ピーターパン」を生きるマイケルと観衆

1993-20-5/11

雑誌を読む 11月

政治の何を変えるのか

森まゆみさん　立花隆さんの「小選挙区制は小沢独裁への道だ」（週刊文春11月18日号）に共感した。小選挙区制賛成論ばかりがマスメディアに出ているようですが、地域で普通の人に聞くと小選挙区制がいいと言う人は少ない。マスコミ主導で論議が尽くされないまま進んでしまうのはいけないと思っていたものですから。政治腐敗防止が国民の最大関心事だったはずなのに選挙制度にすり替えられてしまったこと、小選挙区制では今よりもお金がかかる選挙になること、民意が正しく反映されないこと、世界的にみて時代遅れな制度なことなどの議論はその通りだと思います。女性、環境、福祉といった個別イシューを強く打ち出しても当選できない点もあります。

田中明彦さん　立花さんのは典型的な小選挙区制反対論です。今、政治改革の議論が起きているのは、一つは選挙にお金がかかりすぎるとか政治腐敗の問題を解決するためです。しかし、もう一つ、日本の政策決定システムが無責任な形になりやすく、国際環境が変化する中で素早い政策決定ができないという問題がある。こちらは小選挙区論者が主張している点で、私もそう思います。立花さんはこの点はあまり重要でなく、むしろ危険だと思っているようです。

　小選挙区制反対論は、どちらかというと今の日本の政治の中では政治腐敗だけが問題で、それ以外は大した問題ではない、腐敗防止の法律を作ればいいという考え方です。しかし、その方法で今まで全然解決できなかったということを踏まえないと、議論としては弱い。

森　以前は推進論ばかりだったのですが、なんでこの段階で歯止めをかける論議が多くなったんでしょうね。

橋爪大三郎さん　立花さんの場合は小沢さんに対する危機感が先行している。一番のポイントは腐敗政治を浄化することなのか、それとも別の点なのか。私は政治改革の根本は、政治力を回復することだと思う。立花さんは冷静に制度づくりについてのプラスマイナスの評価をしてほしい。例えば、比例代表制では政局が安定しないという点は簡単な手直しでなんとでもなるから本質的な欠点でないと言うんですが、その論法なら小選挙区の欠点も本質的じゃないことになる。

田中　批判論はほかに浅井基文さん（サンサーラ「小沢・細川『新保守主義』政権の擬装を衝く」）、野田宣雄さん（諸君！「回帰する日本政治」）、西部邁さん（サンサーラ「崩落するニッポンという波濤」など）などがあります。連立与党の性格が批判の性格に反映している。連立与党が小沢氏を含み、社会党も含み、小選挙区比例代表並立制を主張しているということに対し、元保守の人たちはその社会党的な体質を批判する。一方、元革新の人たちは小沢的な体質を批判する。岡崎久彦さんと椎名素夫さんの対談（中央公論「ときには『世論』から離陸する覚悟を」）で言う「レインボーキャビネット」を象徴しているようです。

橋爪　現在の連立与党があいまいな性格なのは当たり前で、批判はいくらもできる。ワンポイントの政権で、自民党が崩壊した結果だから仕方がない。この内閣は政治の制度作りをしようと言っていますが、その目的は自民党と社会党がもうおそらく存続できないだろう時に、それに代わるどういう結集軸を持った政党を作るかという、土台づくりです。社会党が小沢さんにくっついたのは理解できないとか、公明党の力が大きすぎるとかいうのは全部途中経過の問題で、ある程度目をつぶってもかまわないと思います。

橋爪大三郎さん

田中　批判論の場合、オールタナティブがはっきりしない。小選挙区がだめなら比例代表との並立はどうなのか、完璧な比例がいいのか、中選挙区のままがいいのか。国会では選挙区制についてかなり議論していると思うんですが報道では目立ちません。

森　だれが当選するとかいったシミュレーションだけで、制度そのものについての議論は少ないですね。

森　まゆみさん

橋爪　ウォルフレンさんが「日本は官僚支配構造を克服できるか」（エコノミスト11月16日号）を書いています。当初彼は日本には彼のいうザ・システム、官僚の統治機構があって政治家は無力で、政治改革は無力な政治家の入れ替えだから意味がないという考えだったのですが、小沢はなかなかやると言ったり、揺れている。日本に欠けているのは政治的決断のメカニズムだという議論は、欧米圏から日本を見る見方の一つの典型です。

田中　彼は最初の「ジャパン・プロブレム」以来一貫して日本の政治システムには中心がなくて、だれも責任を取らず、それぞれの官僚が運営している、これは日本にとっても問題だし世界にとっても迷惑だと主張しています。腐敗よりは政治的決断が重要という立場で、とりわけ日本のメディアを批判していますね。マスコミが官僚支配構造を支えていて、これに反対する政治家を次々にたたきつぶす。ここに書いてあるのは、いずれ小沢一郎氏もスキャンダルで葬りさられるだろうという予言だと思う。

　ただ、この問題については日本では議論が十分展開されていない気がします。国民にとってはこの前の選挙で政治腐敗の話は聞いていたけれど、政治的決断の話は聞いていなかったということになるんじゃないですか。

田中　明彦さん

橋爪　今月は西部さんが四つほど書いておられて目立っていますが。

田中　西部さんは社会民主主義はよくない、自由民主主義が大事だと言うんですが、急進的変化の時代には市場だけには任せておけないから規制緩和はよくないと言う。どれが悪しき社会民主主義でどれが真の自由民主主義かがよくわからない。

森　歴史と伝統の尊重を強調しているんですが、いったいどんな歴史と伝統なのかが分からないと思います。

橋爪　西部さんはハイエクを下敷きにしている。自由主義の伝統と歴史とがヨーロッパなら無理なく両立しているんですが、日本の場合、下手に戦前からの伝統を言うと、国家主義的な、ここでいう社会民主主義的な伝統の方がむしろ色濃かったということがあり、ねじれています。規制緩和についても、規制は社会民主主義的なものですから、西部さんは緩和に賛成の立場だと思ったのですが、読んでいて混乱しました。自民党に対しては自由主義に帰れといい、社会党に対しては平等主義に帰れと言い、これでは戦後の冷戦体制下の保守革新の対立の時代に戻れと言っているように見えてしまう。

森　ここから何か新しい物が見えてくるという所がないですね。

▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽たなか・あきひこ　東京大学助教授（国際関係論）▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）

自由帳

快調・ゴーマニズム宣言

　漫画家小林よしのり氏の「ゴーマニズム宣言」（『週刊SPA!』連載）が快調である。11月11日、17日号では二回にわたって、部落差別の問題を取り上げている。

　タブーとされてきた社会問題に正面から切りこむ。しかも作者みずから漫画に登場し、原稿がボツになったいきさつなんかも同時進行で描いてしまう。このあたりが人気の秘密だ。今回も、解放同盟の小森書記長と実際に対談した実況中継である。

　小林氏が優れているのは、差別語狩りが差別解消につながらないばかばかしさを指摘したばかりか、その先も考えたこと。「被差別者は闘う根拠と宿命をもつエリート」である。だから、スターや歌手や有名人が集まって「ザ・部落ウルトラ解放フェスティバル」を開き「部落の出だからオレは才能がある」と宣言してもらう。そうやって価値観を逆転させることが、差別を克服する決め手になる。――考え方としてはまことに正しく、敬服するほかない。

　ひと昔前なら「ダサイ」と一蹴されていたかもしれないこうした健康なラディカリズムが復権したことは喜ばしい。ところで気になるそのパワーは、漫画だからこそのものなのだろうか。

　漫画はたしかに全感覚的なメディアである。そこにはセリフも表情も、罵声もしたたる汗もある。差別をめぐる現状への怒りを、小林氏はこぼさず盛り込むことに成功している。そのことをうらやましく思う。

　活字には活字のラディカリズムがありえよう。それは、活字のみを介するというルールに従いながらも、全感覚的な存在である人間から人間への太いメッセージを伝えるはずだ。

　しかし現実には、活字からちょろちょろと貧弱な細流しか伝わってこない仕事ばかりに見えるのはどうしてか。毎月雑誌のページを繰りながら、自分のことも反省されて考えてしまうのである。

（橋爪大三郎）

◆ 読む・ガイド ◆

（月刊誌はすべて12月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
小選挙区制は小沢独裁への道だ	立花隆　週刊文春11／18	強力な政権党、強権政治への野望がむきだしだ
崩落するニッポンという波濤	西部邁　サンサーラ	新政権は社会民主主義に沈み、衆愚制をさらに深めた
「小選挙区＋比例代表」で本当にいいのか	宮川隆義　諸君！	1票の格差はさらに拡大し、権利平等は後退する
小沢・細川「新保守主義」政権の擬装を衝く	浅井基文　サンサーラ	小選挙区導入は小沢氏のもくろむ軍事大国への第1歩
日本は官僚支配構造を克服できるか	ウォルフレン　エコノミスト11／16	政治家に実権を渡したがらないマスコミが改革を拒む
回帰する日本政治	野田宣雄　諸君！	翼賛体制と指導者の弱体が生んだ悲劇を繰り返すな
九十年代不況は公共投資では救えない	伊東光晴　世界	地球環境問題をも見据えて省資源型への企業改善を
景気対策はいらない	飯田経夫　VOICE	消費を無理強いするより低成長に耐える術を学ぼう
「アジアの夢」としての日本の謝罪	石川好　月刊Asahi	西洋文明を謝罪に追い込むため、皆で十万円払おう
アジアを求めるアジア	船橋洋一　中央公論	アジア・アイデンティティーの模索をはじめたアジア
金日成政権論――その馬賊的性格	池東旭　中央公論	パルチザン軍閥は敵だった日本軍閥の忠実な模倣者だ
政界宗教戦争「池田大作の野望を撃て」	溝口敦　現代	公明党政権入りで宗教界が反撃、宗教戦争は激化する
皇室報道　小誌はこう考える	週刊文春11／11	「開かれた皇室論」が皇室の危機を招く。今こそ論議を
美智子さまの祈り	渡辺みどり　文藝春秋	無責任な美智子皇后批判こそ皇室存続を危うくする
特集　何が「皇室の危機」なのか	篠沢秀夫、福田和也他　諸君！	美智子皇后批判とはいったい何だったのか
対談「断筆宣言」と「小説狩り」をめぐって	筒井康隆・瀬戸内寂聴　マルコポーロ	文学がだんだん悪くなったら日本文化の先行きは心配
特集　差別表現とマスコミタブー	安部譲二、いとうせいこう他　創	差別表現について30人が書く「私はこう考える」
テレビは政治を変えたか	田原総一朗　潮	若いメディアゆえに未整理な問題、矛盾が噴出した
「不偏不党」報道はありえない	原寿雄他　週刊金曜日11/12	「不偏不党」や「公正中立」に代え「多様性原理」を
ブルセラ現象の経済倫理学	松原隆一郎　宝島30	自由と法と倫理が矛盾の相に置かれている時代

1993-20-6/11

雑誌を読む　12月

対立すりかえ「コメ開放」

田中明彦さん　ウルグアイ・ラウンドの決着は日本にとって圧倒的なゴネ得だと思う。コメの「例外なき関税化」を認めないですませたわけですから。他の部分では日本に有利なことはたくさんあり、日本の交渉者から見て全体として相当有利なものだった。

半面、小林良彰さんの「コメ市場開放『生産者と消費者の政治力学』」（潮）にもあるように、国内政治から見ると相当不健全だった。ガット側から見れば日本に対して相当な譲歩だと思うんですが、にもかかわらず、日本の現政権、自民党、社会党も含めて、皆、自分がやったのではなく、最後に自分たちが寄り切られた形にした。コメ問題はかなりの程度、国内の農家と大企業、大都市生活者、消費者との利害調整の問題なのに、日本と世界との利害調整の問題であるようにすり替え、自分たちが押し切られて決着したというパターンにした。自己認識において不誠実で今後の対外関係にも心理面で不健全な影響をもたらすと思う。

先月号ですが、吉本隆明さんが「コメの話とは何か」（サンサーラ12月号）で井上ひさしさんにかみついていて、これは吉本さんの方が正しい。それから今月号では森嶋賢さんと兼坂祐さんの対談「対決　日本のコメは絶滅するか」（諸君！）に双方の典型的な議論が出ていて、「コメ鎖国論の拠点」（諸君！）も社説を開放派の全国紙と反対派の地方紙に分けて比べていて、なかなか面白いリサーチでした。

橋爪大三郎さん　国論が二分しているわけですが、論議はほとんどかみ合ってない。農業部門と工業部門のギャップが埋まらないのです。日本は昔は農民主体で農民の利害がそのまま日本の利害だった。それが戦後、変化して、利害が相反する側面を含むようになった。自民党がそこをずっと利害調整してきたわけですが、自民党の中ではコメ自由化の問題をうまく解決できなくなり、細川政権がこの問題のけりをつけた。

しかし、国内の政治力学が健全に働いて、農村＝コメの生産者と、都市＝消費者の利害の合理的な調整がはかられたのかというと、そうではない。消費税の時と同様に、議論は平行線のまま情勢が変化したということで押し切られた。

森まゆみさん　私は賛成したくない。国会決議を三回もして、選挙公約でも開放阻止と言っていたのに、押し切られたというのは不明朗です。井上ひさしさんの論は、大凶作は天災にしても、コメ不足は減反と備蓄を怠ったことによる人災で、だから緊急輸入、だから市場開放というのは短絡だという正論です。別に「高度の文明国を農業国にしよう」とはいっていない。

吉本さんは〝国民大衆一般の立場〟に立つといいますが、農民でもない私が考えると、安全でおいしいコメが食べたいけれど〝安い〟は二の次です。

相互依存は不可避といっても、基本のコメの生産地が遠くなり、間に穀物メジャーだのポストハーベストがはさまってくるのは不安です。それが自分で炊事している大衆の立場です。

橋爪　日本は伝統的な農業を維持するために、コメだけは国際貿易から切り離し、他は開放するやり方を取ってきたけれど、そのやり方が限界に来た。安全なコメ、日本で作ったコメを食べたいと消費者は言うけれど、でも自分で農民になる気はない。農民の中からも後継者は少ない。

森　それはニワトリが先か卵が先かということではないんですか。

田中　日本はコメだけを除外して、他のことは自由にすることで工業製品その他で恩恵を受けてきた。しかしガットの精神では輸入禁止は問題外で国際的な交渉では議論にならない。農水省の人も外務省の人も細川首相も羽田外相も分かっていた。国内の農業部門と工業部門の利害対立であるのにもかかわらず、それを皆、国内と国外の対立に変えてしまった。日本人同士は悪者にならなくてすむということで、一面では利口だと思うんですが、自己欺瞞です。

森　日本のコメ輸入が増えると、飢餓に苦しむ国を一層飢餓に追いやるという議論が週刊金曜日にあります。

田中　日本がコメを買うとコメの価格が高騰し途上国の人の暮らしを圧迫するという議論は、短期的には起こりうることですが、長期的にはナンセンスです。輸出市場の規模は、日本が買うようになれば日本の需要を想定して大きくなる。仮に価格が上がったら、途上国でコメを作っている人が得をし、途上国にとっていい結果を生む。

森　後継者不足は、場当たり的な農政に原因があるのではないですか。

橋爪　現状に手をつけようとしなかったからです。これまでみたいな零細な経営規模で自作農が存続するのはもう不可能です。水田を活かし生産性を上げる目標を立てて、一刻も早く農地法をなくし農協を解体し、地域社会を再建する。そういう前向きの議論がどこにもない。

森　経済的な枠組み以外の所で、環境や文化や伝統として農村と農家を守ってほしいという意見があります。

田中　コメを輸入しないことが問題なので、入れたうえで別な所で補助金を出したり環境を守ったりすることはできる。農村がダメになるという議論は、日本人の想像力やイニシアチブを無視した議論だと思います。

＊

田中　国際政治で今年話題になったのはサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」（フォーリンアフェアーズ夏期号、中央公論8月号に邦訳）だった。私はその内容には反対だし、アステイオン冬季号が反対特集をしているように、反対論がほとんどです。しかし、「文明の衝突」という議論を無視するわけにはいかないというところに今年の特徴があったと思う。

森　私は思想の科学7月号のフェミニズム特集が印象的でした。フェミニズムという思想が日本でいわれるようになって十年以上たちましたが、すごく多義的な言葉になった。共生とか受容的なコミュニケーションとか男の人との闘争ではない方に傾いているのが興味深かった。

橋爪　今年出た雑誌では週刊金曜日と宝島30。宝島30は皇室批判の記事を出して、ピストルを撃ち込まれたり謝罪の記事を出したりいやな印象が残った。雑誌が商業的なのはやむをえないが、そのうえに一つこれだけは大事にするというものがないといけない。週刊金曜日の方は共産党、社会党と同じで家元化していくしかないなあと思いました。

▽たなか・あきひこ　東京大学助教授（国際関係論）▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）▽もり・まゆみ　地域誌編集者

左から田中明彦さん、橋爪大三郎さん、森まゆみさん

自由帳

PKO、反省と再検討

次から次へと新たな政治課題が登場する中で、一年ほど前、大きく取り上げられていた問題が、ほとんど忘れられたかのようになっている。PKO（国連平和維持活動）問題である。幸い、今月の雑誌には、これらの問題を考えるための論考がいくつか掲載された。

カンボジアで行われたPKO活動に日本は、はじめて自衛隊を参加させたわけだが、この経験から汲み取れる実務的な問題点については、牛場昭彦「『運頼み』日本PKO物語」（『Voice』）が要領よくまとめている。カンボジアのような、伝統的PKOの手法にもっとも近いとされる事例、そして成功だといわれる事例についての参加についても、「武器使用」についての規定など、現行のPKO協力法には検討しなければならない問題点がある。

カンボジアについて、そして日本と国連との関係については、より広い視野から、明石康「日本のラジオがカンボジアを救った」（『正論』）がよい。いうまでもなく、明石氏は、UNTACを成功に導いた、国連の事務総長特別代表であり、今また、旧ユーゴスラビアの平和活動における国連の事務総長特別代表に任命された、日本人の国連協力への大黒柱ともいうべき人物である。

日本とPKOとの関わりだけが問題なのではない。国連の平和に関する活動すべてに反省と建設的再検討が求められたのが、一九九三年であった。ソマリアにおける国連の「失敗」については、リチャード・フォーク「ソマリアPKO失敗の教訓」（『世界』）が、現地における諸政治勢力間の合意の存在しない地域への国連の介入は、失敗する運命にあると説く。それではどうすればよいのか、という問題については、ラギー（「平和維持活動と強制活動の間」『中央公論』）の論考が、一つの答えではある。しかし、内戦のような紛争への関与については、根本的な発想の転換が必要だろう。「抑止」などの古典的概念にとらわれるのは適切でない。（田中　明彦）

◆読む・ガイド◆

（月刊誌はすべて1月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
コメ市場開放「生産者と消費者の政治力学」	小林良彰　潮	コメ開放には国民、特に農民が納得できる手順が必要
対決　日本のコメは絶滅するか	兼坂祐・森嶋賢　諸君！	日本のコメに競争力をつけることは本当にできるのか
農産物輸出大国に翻弄されたコメ部分開放	佐伯尚美　エコノミスト　12／21	日本は農業、食糧なき経済大国への道を選択した
コメ櫃を空っぽにしたのは誰だ	坂本進一郎　週刊金曜日12／10	農民とコメが大企業の犠牲にされようとしている
新保守主義革命としての政治改革	高畠通敏　世界	中曽根政権以来の新保守革命が小選挙区制で完成する
並立制パニック　自・社直撃	岩井奉信　THIS IS　読売	新たな政治体制が定着するまで混乱は不可避だ
座談会　小選挙区制で中道右派の巨大政党が出現する	エコノミスト　12／7	中道右派の一大政党と、左右両派の小政党になる
「新産業・雇用創出計画」を急げ	島田晴雄　中央公論	構造改革が失敗すれば大量の失業とインフレは必至だ
問題としての小沢一郎	福田和也　Voice	小沢氏が掲げる政策の有効性を問う姿勢が必要だ
いま裁かれるべき歴史は何か	西尾幹二　諸君！	共産主義的全体主義終焉を正しく位置付ける歴史観を
新世界無秩序論をこえて	五百旗頭真　アステイオン冬季号	グローバルな重層的協調システムの存続と発展が必要
三重スパイ　野坂参三	伊藤律　文藝春秋	伊藤氏が側近に託した極秘メモに野坂氏の活動記録が
社会主義市場経済は「砂上の楼閣」か	朱建栄　中央公論	中国は地球の常識を破る巨大な経済大国になるのか
アメリカを蝕む「多元文化主義」	F・フクヤマ　サンサーラ	米国社会が共有する価値観や連帯意識が破壊される
団塊の親たちの無残な失敗	宮台真司　諸君！	「友達親子」という幻想が生んだブルセラ女子高生
逆襲された「メディアの神話」	山崎浩一、秋元康ら　中央公論	93年は価値観の変革の年、メディアが逆襲された年だ
「饒舌列島」日本の言論	加藤秀俊　中央公論	おしゃべりになった日本人に言論の自由はあるのか
神々の黄昏	島田裕巳　宝島30	冷戦が終わり、宗教ブームもどこかへ行ってしまった
総力特集　岐路に立つ皇室論議	鈴木邦男、松原隆一郎ら　宝島30	大内糺氏の謝罪「皇后陛下にお詫び申し上げる」入り
特集　皇室論争の検証	篠田博之、亀井淳、猪瀬直樹ら　創	55年体制の崩壊と軌を一にした天皇イメージの変容

1993-20 7/11

これは「国際化」なのか

Jリーグの「衝撃」

橋爪　日本では戦前から商業スポーツで一番人気があったのはアメリカから入ってきた野球。それが、サッカー人気が伏流してきて、一九九三年という時点で、テレビの視聴率を二分する現象が起こった。それが今の政治改革とシンクロしていると思うんです。

サッカーは、イギリス中世のお祭りだったのが国技になった。アメリカはイギリスから独立した関係でイギリスの国技をわが国のスポーツとするわけにはいかない。それで野球とバスケットとアメフトをこしらえた。で、影響下にあるキューバとか日本とかに植え付けた。日本はそれを一番まねてきたわけですが、気がついてみたら、世界でスタンダードなスポーツはサッカーだった。日本がずっと野球を金科玉条のごとくしていたというのはサンフランシスコ体制そのものです（笑い）。サッカーは開発途上国の人たちが熱狂的に支持している。こういう全地球的なスポーツが入ってきてプロ野球人気にかげりがでたということに象徴的なものを感じます。

田中　山藤章二さんとの対談「Jリーグに未来はあるか」（諸君！）で、諸井虔さんがサッカー人気に懐疑的で「情緒性に満ち、筋書きのないドラマ性にあふれた相撲やプロ野球に勝てるだろうか」と言っている。

森　今はサッカーやる子が多いですね。クラブでも野球よりサッカーの方が盛んだし。プロミスリングって駄菓子屋で一個五十円で飛ぶように売れて、一人で百個とか二百個とか持ってるみたいですね。

田中　野球の方がナショナリスティックな面が多い感じです。外国人選手は助っ人だとか外人だとか言って差別してるでしょう。日本のプロ野球に典型的に日本社会の閉鎖性が表れている。それに比べると今のJリーグの方が外国人選手をおおらかに扱っている。肩ひじ張って外国人選手に負けるのはいけない、なんてあまり言わないでしょう。国際化を象徴している感じはします。

森　丸谷才一さんが「現代」（「どこ吹く風」）で面白いこと言ってます。日本のチームだから日本語の名前にしろって。清水エスパルスは清水ジロチョウにしろって。

橋爪　サッカーはワールドカップという興行があるのでストーリー的に組み上がっていく熱狂が維持できる気がするんです。野球でまずい点、相撲でもっとまずいのはワールドカップにあたるものがない。日米決戦すらない（笑い）。これがフラストレーションですね。

森　「宝島30」でカタカナ商売（中田潤「われわれは、なぜカタカナ職業にだまされたのか」）があって、バンドブームの時にミュージシャンを追いかけていたライターがJリーグの観戦記事を書いているということだそうです。これもバブルじゃないのか、と思います。

田中　ジーコという人は、うまい上に紳士で立派な人なんですね。こういうことは日本ではいいことなのかどうか。

橋爪　アメリカではバスケットの選手がそれなりのモラルを求められますよね。ブラジルでもサッカー選手が青少年のアイドルあるいは文化的理想像になって大きな教育効果を持つんじゃないでしょうか。

田中　日本の政治と同じで、もう日本じゃ、野球選手がそういうモデルになる役割を果たせなくなったんですかね（笑い）。

橋爪　第三世界の一種の夢ですね。いつかプロになって社会の尊敬を集めて収入もすばらしい、と。そういう夢を配るだけで、いろんな社会の矛盾がある国が安定する。日本は、そこまでの貧しさはないはずなんですが、少年たちがこれだけサッカーに夢を求めるのは、目に見えない形でいろんな垣根や圧迫感があるからじゃないかと思います。

森　町づくりでもJリーグを活用してますよね。鹿島とか市原とか。

田中　ある種の都市がそうなるのは、日本社会にとって健全なことだと思います。

橋爪　国際化が新生党、フランチャイズが日本新党ですね（笑い）。全部東大、全部国会、全部東京と、こういうものに対して皆あきあきしているわけですよね。全く違った価値基準があって違った人生があることを皆知りたいんです。

後書き

月一回「雑誌を読む」を始めます。ポスト冷戦、五五年体制の終焉という世の中の変化の中で、かつて「論壇」といわれた言論の舞台を見る視点も変わって当然だろう、という考えから企画したページです。

常連は橋爪大三郎さん、森まゆみさん、田中明彦さんの三人です。座談会と一覧表「読む・ガイド」作りのアドバイス、持ち回りでコラム「自由帳」の執筆をします。

編集部が三人にお願いしたのは、その学識はもちろんですが、率直な語り口で問題をわかりやすく解明することが得意な方々だ、とにらんだためです。今後も政治・経済・国際関係はもちろん、幅広いジャンル、メディアを対象にしていきます。

今回の座談会では立花隆氏の「小沢悪玉論」について最も長い時間を費やしました。政界変動の仕掛け人である小沢一郎氏の評価については、日本政治とリーダーシップの問題も絡んで今後も論議はつきないと思います。（雅）

「保守」の意味は…

田中　日本の新政権の方向を国際関係の枠組みの中に置いてみたのは田中直毅さんの「日本の孤立が見えてきた」（エコノミスト8／17・24）くらいしかない。年内にいくつかやらなければならないことがあると指摘している。一つはコメの関税化。もう一つは、中国の問題。日本の景気が悪いにもかかわらず、アジアの経済がいいのは、中国がバブルで景気がいいからです。細川政権の景気政策が単に国内の景気対策だけでやっていいのかという視点は重要だと思います。今、中国でバブルがプシュッといったら、ほんとに世界同時不況になってしまう。

森　月刊Ａｓａｈｉの内山秀夫さんの論文など、総保守化したという論議がありますが。

田中　保守とは何を意味するかですが、総保守とか保守二党制とかいう言葉が意味があるとすれば、今まで自民党とくっついていた人たちか、今まで自民党が言っていたことと似たようなことをいう人たちか、ということになります。でも、それ以外の新機軸、真の現代的意味における革新なり進歩とは何かをあまりだれも打ち出していない。

森　篠原さんの論文の中に、護憲平和、非軍事的社会理念の文化輸出、階級社会化した地球社会での価値の再配分、ワークスタイルの変換、環境重視とあって、賛成できる目標と思いますが。

田中　護憲的平和主義以外の文脈は、今の総保守化した人たちはみんなOKというんじゃないですか。小沢一郎さんだって。今回の事態を面白くないとする人からいうと、昔の自民党・官僚癒着体制の方が対抗しやすいんですよ。両方とも、頑迷固陋だから。

戦後民主主義と恋愛

森　佐藤健志さんの「ぼくらの『純愛』ごっこ」（ＶＯＩＣＥ）というのは、よくある話を使って戦後民主主義批判をやってるのかな、という感じがしました。恋愛が成り立たない一つの理由は障害がないからだ、というのがあって、その障害のなさの元凶が戦後民主主義ということですね。

橋爪　佐藤さんというのは、二十六、七歳ですか。自分の世代のことをこれだけ、クソミソにいう人も珍しいですね（笑い）。ロジックが独特で、戦後民主主義というのは恋愛を否定する理念だ、と。権力というのは矛盾や対立があった時に、唯一解決を与える最後の手段だけど、戦後民主主義が権力を否定したために矛盾や対立を解決する手段がなく、矛盾や対立もないことになってしまい、男女関係においても矛盾や対立や自己主張がなく、従って恋愛ができない、と。きょうの議論で言うと、戦後民主主義がそういうものだったとしたら、恋愛もできないし、政治もできない。対立がなければ談合になる。それを男女関係に投影すると恋愛できないということになる。ぼくらはどちらかというと、政治に関してはそういう話をしてきたから、恋愛に関して否定してしまうと、首尾一貫しなくなるな。

森　ここでいう恋愛ができた時代というのは、団塊の前の青い山脈の世代じゃないですか。親に逆らい、家という制度に逆らって。「マディソン郡の橋」が売れて、今、恋愛特集が女性誌ですごくはやっていますね。今月だと講談社のフラウとか。女性誌に出てるのは短くても燃え尽くす愛というのが多いですね。

橋爪　恋愛したいのに男が駄目でできないという訴えは普遍性があるんですか。

森　いや、女性の意識が恋愛から遠い。今の若い女性は計算高いですよね。子供は六月に生まれるように、と。ボーナスが入らないと出産費用が出せないから。四月に保育所に入れるためには十二月までに産む。ライフコースを設計するクセが早くからついている。

橋爪　固定観念にとらわれていたら恋愛はできないですね。どうしたら面白くなるかをよく知らないんだと思う。どうしたらいやなことが避けられるか、ばかりではね。

森　いやなことを避けるのが基本で、小さな快を追い求めていて大きな快を取り逃しているような感じ。

橋爪　大きな快楽を自分から手にいれることを、目標にするということをやったことがない。

田中　そこまで抽象化すると、日本企業の行動パターンと似てますね。ハイリスク、ハイリターンを嫌って、リスクを最小化する。

橋爪　弱者の行動様式ですね。五五年体制は弱者で貧しいところから始まったけれど、いまは大国で戦争のない、先進国の坊ちゃん嬢ちゃんですよ。そこで弱者の行動様式に閉じてしまうのは大変まずいという気がします。

田中　ただ、リスクを最小化したいというのは、それほどおかしくないですけど、日本のリーダーシップ論とも似てるんですよ。小沢氏みたいな強いリーダーがいないと大変なことになるぞ、と言うと、ああいう怖いのがやってくと独裁になっちゃうという意識と、ちょっと似てるところがある。

後書き

総合雑誌は政治一色といった感じですが、月刊誌の場合、細川政権発足が固まる前に九月号締め切りとなったものが多く、本格的な新政権論はこれからのようです。

政権交代で五五年体制はとりあえず解体しましたが、政策については連立与党内、与野党間でさまざまなねじれを抱えたままです。次のステップでは各政治勢力のすっきりした再編成が必要でしょう。座談会で話題になったように、論議は始まったばかりで、実際の動きもこれからです。まだしばらくは政治の季節が続きます。（雅）

毎日新聞（夕刊）　1993年（平成5年）9月21日（火曜日）

1993－20 8/11

差別と差別表現とは

筒井康隆「断筆宣言」

橋爪　作家の筒井康隆さんの「断筆宣言」が話題になってます。筒井さんが二十九年前に書いた短編小説「無人警察」が角川書店発行の来年度の高校一年の「国語I」の教科書に採用され、検定も通った。ところが、その中にてんかんに対する差別助長的表現があると日本てんかん協会が削除などを求めた。角川書店は要求を拒否して改訂はできないと答えた。筒井さんは抗議には承服できない、ほかにも日本には差別表現に対する規制が多すぎる、そういうことでは小説を書くことができないといって「断筆宣言」をして小説を書くのをやめてしまった。「SPA!」の連載まんが「ゴーマニズム宣言」でも小林よしのりさんがこのことを取り上げて、差別表現を摘発していくということは非常におかしいのではないかという論陣を張っています。

森　「宝島30」8月号に池田清彦さんが「差別表現狩りをしても差別がなくならない理由」で書いてましたが、何か抗議があったときに公開の場で論議をしないままに圧力に負けてすぐに引っ込んじゃうという体質そのものが問題なんじゃないかと思う。そのぶん差別が陰湿に内にこもっていって、差別そのものはなくならないまま、表面はことなかれ主義になっていく。

橋爪　池田さんの議論にはまったく賛成で差別をなくすことと差別表現をなくすこととの間には関係はなくて、むしろ差別表現をなくすということだけを考えることによって差別が助長される場合がある。

田中　差別と差別表現の間に関係がある場合もある。差別表現がどんどん使われると、それによって人が影響される場合もあって、特に差別表現が差別表現と意識されている場合は非常に問題がある。逆に、差別感情があるのにその言葉だけ代えればいいということになるのも困る。なかなかむずかしいと思います。

森　ジャーナリズムの側が本当に言葉の背後にある差別をなくすことに力を使わないで保身的にマニュアル化するのはよくないと思う。ただ何を差別と考えるかは個人差があるしケースバイケースで、私なんか主婦なんて勝手にいわれたくないな、って気持ちがありますよね。言われた側は個人として不快であると表明していけばいいことで、団体で圧力をかけることはない。一方、作家が「感性の自由」だけを振り回すのも特権的です。作品は理性でも書くもので、言われる側の痛みを知って、なおかつ覚悟を持って使っているかが問われる。

橋爪　日本国憲法が保障している表現の自由は、仮に差別思想を持っている人がいて差別的表現をしたとして、それは保障されるんだろうか。私はそれは保障されていると思う。

田中　僕もそうだと思う。

橋爪　一方で憲法は差別をなくしていくという人権思想を持っている。だからそこの間には矛盾が起こりうる。問題は差別をなくしていく方法論だと思う。

森　筒井さんのような反制度的作品は反制度的な場の方が生きますね。教科書は一年間それに付き合わないといけないもので、一般の書籍とは違うという江川紹子さんの指摘（「『てんかん』記述論争で文部省は逃げ腰」創）もうなずける。

橋爪　教科書は教育的配慮のもとに作られるものだから、わいせつ表現とかある種の表現は載せてはいけないわけで、差別表現も載せてはいけないのです。

田中　閉じられた空間でなかば強制的に提供される素材としてはふさわしくないというものはある。ただ自分のお金を出して買いたい人が買うということであれば、それは違う。そこまで言い出すと表現の自由に制約的に働いてしまう。筒井さんの作品の問題と教科書に載っているという問題はいくぶん分けて考えないといけないように思う。私自身は教科書の検定には反対ですけれど。

橋爪　この問題でいちばん大人げのある解決は、てんかん協会がこの教科書を使用している人に副教材のようなものを配布するということで角川書店側と話をつけることだと思います。

田中　先生がしっかりしていれば、筒井さんの反論も使い、差別と表現という授業をやればいい。

橋爪　そうですね。ディベートのいい授業になる。

後書き

細川首相の「侵略戦争・謝罪」発言については、世界、エコノミストが一定の評価を、諸君！、正論、Voiceが批判に比重を置いた編集をしています。THIS読売、文藝春秋は中間で、月刊Asahi、中央公論、潮などは今月はパスという印象です。批判記事が多かったVoiceにも細川擁護論が載っているなど、色分けは難しいところがあります。

反対論者の議論で気になるのは、謝罪問題が「社会党左派」など、いわゆる「左」の人に特有の主張であるという見方が結構多いことです。この前提はかなり無理があると思います。そもそも細川氏の発言の背景には、連立与党だけでなく自民党内にも賛同者が増えつつあるという情勢の変化があると思われるからです。ここでも、左右の枠組みに寄り掛かった議論が意味を失ってきていることを感じます。

ちなみに、決して「左」ではないはずの座談会の三人とも、細川氏の姿勢を評価し、熱っぽく長い時間をかけて謝罪反対論に批判を加えていました。（雅）

毎日新聞（夕刊）　1993年（平成5年）10月26日（火曜日）

TVの“報道姿勢”問題

田中　総選挙報道に関する発言が問題になってテレビ朝日の報道局長が辞職した。国会での証人喚問も行われて、テレビが政治の動向に強い影響を与えるということがクローズアップされています。この問題の表面化の前ですが、今月は中央公論が座談会などで「テレビと政治」の問題を取り上げています。ただ非常に表面的だという感じがする。宮沢さん（前首相）がテレビの田原総一朗氏のインタビューで「政治改革は絶対にやります」と言ってしまったことで「宮沢さんはうそをついた」という話になり、内閣不信任案につながった。これはその通りなんだけど、テレビが日本に登場したのはもうずいぶん前ですね。政治についてもテレビはこれまでもいろいろ関与してきたわけで、何で突然今回非常にテレビが重要だったのかという点は十分解明されていない気がします。

橋爪　「テレビと政治」ということでは論点は三つあると思う。一つは予測報道。「人々がこういう投票行動をとるであろう」ということは事実であっても、それを報道してしまうと投票行動そのものに影響してしまう。これは、テレビ自身が予測報道を控えるなり予測報道に影響されないような選挙制度を工夫するなりして克服すべき問題ですが、まだ議論は全然煮詰まっていない。二番目は事実をテレビが作り出す面。イメージと呼ばれるものですね。宮沢さんはニヤニヤしている、細川さんはハンサムだ、と思われたりするわけですが、それが政治力になってしまうのはどうしようもないんで、そのこととテレビが政治を変えたり支配したりしているということの関係を考える必要がある。

森　それはテレビが恣意的にということではなくて、ということですね。たくまずしてなってしまう、という。

橋爪　そうです。三番目は、そういう効果を分かったうえで、だれかが意図的にそれを報道番組の中に潜り込ませる、いわゆる偏向。いま問題になっているのは、これですね。これは報道の不偏不党と関係するけれど、私は報道が不偏不党でない場合があってもいいと思う。しかし公正であるという顔をしながら、そのての操作をしていたなら、これは大問題です。

森　記憶にあるのは、ケネディとニクソンのテレビ討論。どう見えたか、ということで騒ぎになりましたね。中央公論の論議はだいたいこの点に終始しています。筑紫（哲也）さんにしても田原（総一朗）さんにしても、どの政治家がどんなイメージを持っていて、ということに集中している。

文藝春秋の「女が選ぶ政治家ベスト10」は、腹立たしいというか、ばかにしていると思いましたね。手法も初歩的だし、男性の記者による匿名座談会があって、結局女はイメージに左右されるんだという話に持っていっている。

田中　これは卑劣な特集ですよ。最後に匿名の座談会をやってコメントしている。

森　そういうイメージの問題よりも、橋爪さんの言われた偏向のほうが重要だと思う。放送法がありますが、一定の周波数の電波を独占的に使うということでは、やはり公正・不偏不党を意識することが前提ではないでしょうか。

橋爪　出版物と違ってだれでも容易に接触できるメディアだということがありますね。そのうえでケーブル・テレビぐらい多チャンネルになれば不偏不党でなくてもいいかな、ということですが。

田中　諸井虔さんの「巨大権力テレビの無自覚を問う」（文藝春秋）にもありましたが、ニュース番組で人間味を出そうというのはいいんですが、ニュースを伝える人が安易にコメントを言うのがいいかどうか。もちろん根源的には見る側の判断力の問題ですが。不思議なのはアメリカはそんなに厳しい規制はないと思うけど、ニュース番組でキャスターが、これはいいとか悪いとかコメントをいうことはまず絶対ないですよね。

橋爪　それは久米宏さんの「ニュースステーション」（テレビ朝日）以後という気がします。従来の「大本営発表」流から比べると成熟だと思いますよ。

田中　「テレビと政治」の論議ではなにかネガティブなものが多いんだけど、私はそれだけではなかったと思う。政治改革にしてもそれに反対している人が、その論拠をテレビで明確に示せなかったということがある。だから「永田町」ふうにいえば、テレビの中では建前だけが突っ走ったことになる。ただ、これはある種日本の政治を健全化する効果があって、テレビがあることによって建前とホンネの区別をつけにくくさせた。テレビによって建前とホンネの区別が出来なくなったとすれば、これは大変結構なことですよね。日本の政治における議論の質はテレビによってむしろ上がるということもいえると思います。

後書き

政治改革をめぐって燃え上がった「改革論議」が、今月の雑誌では経済問題にシフトしたようです。景気対策と構造問題が中心テーマで、主流を占めたのが減税と消費税増税の時間差実施論でした。

ただ、気になることがあります。これらの意見は政府税調はじめ細川政権の基本方向と同じで、反対論も、構造改革の方向について共通している議論が多かったことです。私自身は時間差実施論に同感する部分が多いのですが、一読者としては本格的な反対論と読み比べてみたい。

政策面でほとんどの勢力が与党化していることの反映かもしれません。腰を据えた議論の中でこそ、政策が鍛えられることを考えると、この状態は決して好ましいことではないと思うのですが。（雅）

毎日新聞（夕刊） 1993年（平成5年）11月22日（月曜日）

1993-20 9/11

「伝統」と「人間」との矛盾

「開かれた皇室」論議

田中 皇室報道についての論議がたくさんあるんですが、全体的な印象をいえば、日本国憲法の下の今の政治体制の中で、皇室という制度は根本的に難しくなっているんじゃないかという気がしましたね。皇室に対して、一方で日本の伝統を体現する役割を果たせという議論がある。しかし、物理的に皇室の人たちが現代社会の中で孤立して生きていけるはずはないんで、伝統体現の要求と、皇室の人間としての側面が矛盾せずにこのままやっていけるだろうかということです。

橋爪 議論のことの起こりは現在の天皇・皇后が昭和天皇とどうも違うということらしいんですね。でも違うのは当たり前なんで、昭和天皇は旧憲法下で天皇としてのトレーニングを受けて旧皇室典範でやってきた旧世代。彼が戦後も随分長く天皇だったので、いま指摘された矛盾が表に出なかった。確かに個人がこのシステムを主体的に担い続けるのはもう限界なんですね。

森 昭和天皇が亡くなる前は、民主的な「開かれた皇室」を推進した人として美智子さんを支持する論が多かったですよね。ここに来て、なんで突然「開かれた皇室」に対する反対というかたちの論議が出てきているんでしょうか。

田中 いわゆる「開かれた皇室」というかたちが日本国憲法の天皇についての条項以外の内容とぴたっと適合するか、それもあやしい面がある。皇室を開いていけば行くほど、日本国憲法にある天皇の規定との間に矛盾を生んで来てしまうということがあります。

森 「話の特集」にありましたけれど、国民は婚約の記者会見以来、雅子さんの肉声を聞いていない。男女平等といった憲法の理念とも矛盾してしまってますね。女性週刊誌にあった「美智子さま、皇太后さまのお世話を」という記事も気になりました。嫁であるものは姑の世話を、という家族制度の一番古い面でやっていくべきだと書いているんです。

橋爪 どうして急に「美智子皇后バッシング」になっちゃったのかですが、昭和天皇が存命中は昭和天皇への風当たりが強くなることが一番心配だった。だから、元華族や皇族出身ではない若い美智子さんが国民的人気があって、戦後の憲法の下、皇室を支える立場になったのは歓迎すべきことだった。しかし、昭和天皇が亡くなり美智子さんが皇后になって、過度にそのイメージを受け継いだまま皇室を開かれたシステムにしていってしまうと、民主主義のイメージと天皇が持つ古い部分との乖離が生じてしまって根底が脅かされるという、力学の変化があったんだと思う。だから「保守派」の人々は随分めちゃめちゃ書いてますよね。雅子さんは日本語をよく勉強しろ、だの。

森 和歌の練習しろ、だの。

橋爪 パーティーはいいから子供を生め、とか。率直に言って人権的な感覚からして大変失礼なことだし、私は腹が立ちました。

田中 加地伸行さんが「大切なことは、天皇（皇族）ではなくて天皇制」（諸君！「天皇の役割は国民のために祈ることだ」）と言っているように、「開かれた皇室」への動きを不愉快だと思っている人たちの議論は、人間として皇室に存在している人たちに対して、天皇制のために自分の欲求といった人間的なものは二義的にしろと言っているわけですよ。日本国憲法は皇室の人権についてはきわめてあいまいなんですね。

橋爪 村松剛さん（諸君！「皇后陛下への批判は問題の焦点を見失わさせる」）とか加地伸行さんとか、天皇にああしろこうしろと注文を付けている人たちのものは、その意味で人権侵害そのものです。

森 加地さんは「皇太子妃の役目は……ただ一つ――子を生み皇統をたやさぬこと」と書いてます。ひどい話です。

橋爪 非常にミスマッチである象徴天皇と現在の戦後民主主義のシステムとをどう切り盛りしていこうかという積極的な観点から書いてある議論は皆無でしたね。

田中 篠沢秀夫さんの議論（諸君！「昭和天皇とは違う。違ってどこが悪い？」）は良識があると思いました。

橋爪 抑制がきいていて、さすが学習院の先生。昔は昔でよかったし今は今でいいじゃないかという。最も良識的ですね。

後書き

今月の総合雑誌では小選挙区制批判が噴出しました。主な対立が小選挙区比例代表並立制の枠内に押し込められ、反対派が少数の国会とは全然違います。この大きなズレは何を意味するのでしょうか。

まず政界です。かつて並立制に反対だった社会、公明、民社各党が支持に転換し新党と妥協したことで細川連立政権が成立し、それが国民の高い支持を得ました。小選挙区制反対は共産党だけで、政治改革の大枠は国会論議の前に政治決着した形になってしまった。制度をめぐって民意が問われたわけでもないにもかかわらず、です。

次は雑誌です。概して「反権力」「左翼批判」など政治的立場を売り物にするのが伝統で、中間的で穏健な議論より鮮明な議論が好まれました。しかし、細川政権のように穏健な中道現実主義路線を支持する層が多い時代です。伝統的手法による議論はかつてほどの有効性を失っていると思います。

政界、総合雑誌に共通の課題は「民意」を正確にくみとる枠組みを作ることではないでしょうか。（雅）

週刊読書人 1993年〔平成5年〕12月17日（金曜日）

アンケート特集 一九九三年の収穫

恒例の年末アンケート特集「一九九三年の収穫」をお送りします。広く諸分野の専門家、読書家の方々に、この一年間に日本で出版された書籍のなかから、ジャンルを問わず、一年を通して今年の収穫と思われる本を三冊づつ上げていただき、それぞれに短いコメントを添えていただきました。掲載は五十音順としました。（編集部）

橋爪大三郎

宮台真司・石原英樹・大塚明子『サブカルチャー神話解体』（パルコ出版）。少女メディア、音楽、マンガ、性風俗の四領域に焦点をしぼり、異様ともみえる情熱で現象に肉薄する大がかりな分析作業の中間報告。『アクロス』連載時から注目を集めた。数十年もすれば不動の古典となっているかも。

吉澤夏子『フェミニズムの困難』（勁草書房）。団塊世代とその周辺を巻き込んだラディカル・フェミニズムの洗礼が一巡したあとの、普通の女性のフェミニズムの思索。「敵対する男／女」を前提しないとすまない政治主義からの脱却を果している。

佐藤俊樹『近代・組織・資本主義』（ミネルヴァ書房）。日本資本主義の特異なリアリティを、M・ウェーバーの方法に戻って再構築する現代的な試み。近代との対決なしに≪「近代のむごう」を気取ってもしかたない≫という指摘に共感する。（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学助教授・社会学専攻）

毎日新聞 (夕刊) 1993年(平成5年) 12月21日 (火曜日)

1993-20
10/11

ブルセラ現象

「団塊の親たち」の失敗？

橋爪 宮台真司さんの論文（「諸君！」「団塊の親たちの無残な失敗」）は「なぜブルセラ女子高生は、親バレしてもパンツ売りをやめないのか」が入り口です。「ブルセラ」は「ブルマー&セーラー服ショップ」の略だそうで、親にバレるのが「親バレ」。それが彼女たちに対して抑止力として働かないというのです。どうして女子高生が「ブルセラ」をはじめ手軽に風俗系のバイトをするのかということの解釈については、宮台さんの解釈に松原隆一郎さん（宝島30・12月号「ブルセラ現象の経済倫理学」）が反対しています。

田中 要するに何が問題だというのでしょうか。

橋爪 宮台さんの考え方は意外にオーソドックスです。子供の成長には父親の役割が大切だ。しかし父親が社会環境の変化で権威を失っている。同時に女子高生が情報過多のメディア環境にさらされていて、いままでの処方せんは役に立たないから、新しい状況の中で方策を考えていきましょうということです。

森 父親の権威というのは、学校などでもよくいわれますね。

橋爪 宮台さんのストーリーは、こういうことです。団塊の親たちは権威に反対し、世間的な道徳を鼻で笑った。会社に入ってもそれは共同体へ一〇〇%帰属することではなかった。この傾向はミーイズム（私生活主義）として称揚され、家庭は「友達親子」ばかりになっていった。ところが子供にすれば、ありがた迷惑以外の何ものでもなくて、ロール・プレーイングだけで権威がない。

田中 団塊の世代は彼らの手法で子供たちがちゃんと育つと考えていたのに、それがだめだったということですか。

橋爪 一番だめなのは、問題が起こったときに、やはりスキンシップが大切だとか子供に対するかかわり方がよくなかったとか、倫理や道徳観念を立て直さないといけないとか言い出す「言説の五五年体制」の石頭だと、宮台さんはいいます。

森 「父親が家にいないことが問題で、特に中学生になったら父親が必要ですから」といったことを学校でいつも聞かされます。

田中 でも、松原さんの文章を読んでもブルセラ現象とかはマイナーな特殊なことのように思えますけれどね。

森 マスコミが大げさな言説で作りあげている現象を、ちょっと面白い切り口で切って見せる。それをまたマスコミが別のかたちで売ろうとする。そういうことで、あまり一般的でないことが非常に喧伝されていって、それをまた見てそういうものに走ってしまう子供が出てきてしまう。そんな悪循環があるように思います。

田中 宮台さんは松原さんの批判をわりに単純に退け過ぎている気がします。

橋爪 消費社会が悪いという論法はいかんせん単純過ぎて宮台さんの指摘が当たっていると思うけれど、松原さんはけっこういろいろ言っています。宮台さんは、女子高生の気持ちも分かるが説教もしてみせる兄貴分になっているけれど、これはまずいとか。

田中 ブルセラ現象が本当に問題だとしたら、供給側だけでなく需要する側の問題もある。つまり、欲しがるオジサンがいるわけで、宮台さんの分析にはこの側面がないようにも思う。このオジサンは年齢的には団塊の世代になるんで、ブルセラ現象と団塊の世代ということだったら、こちらの矢印の問題もあるはずですが……。ところで宮台さんの説く方策は、どういうねらいなんですか。

橋爪 境界的な事例に対して古い世代が倫理的に反応して「不法行為」扱いしてしまうと本人のマイナスイメージが堆積して、本格的不法行為に進みやすくなる。そして自分を守るすべを知らないために「重大な危険」との間の敷居が低くなってしまう。だから危険を危険として認知させて危険と闘うために、いわば「ワクチン」として失敗した事例などをビデオにしてどんどん見せるといった方法を取れといっている。情報に対して情報で闘えというわけで、これは私も賛成です。

森 でも、すべての問題について子供に情報だけが押し寄せるということになってしまうんですね。

後書き

ウルグアイ・ラウンドが十二月の最終合意に向けた動きをしていることは相当前から分かっていたことですが、十二月発売の総合雑誌ではコメ市場開放、農業問題の議論は少なく、ましてラウンド全体について論じたものはほとんどありませんでした。

例えばコメ問題は「諸君！」「週刊金曜日」が、それなりに力を入れた編集をしていた程度で、「世界」「中央公論」「文藝春秋」といった老舗には皆無です。

読者の興味・関心が薄い、すでに論議は尽くされている、などの判断があったのかもしれません。しかし、どうも総合雑誌のテーマ選びと世の動きとがきちんとつながっていない印象が残ります。

各誌とも新年特集を組んでいますが、目立つのは椿発言や皇室報道をめぐるメディア問題。メディア内部の問題についての感度は比較的いいようですが、いずれもあまりパワーが感じられない。

月刊Asahiが来年二月発行を限りに休刊するそうです。雑誌という場における言論は冬の時代なのでしょうか。

（雅）

月刊●進研ニュース／中学版　第177号　1994年(平成6年)1月1日

橋爪 大三郎

奨学金で入試を全廃しよう

はしづめ・だいさぶろう＝一九四八。
東京工業大学助教授・社会学

初等・中等教育をゆがめているのが、大学入試であることは言うまでもありません。

大学入試はなくせます。十年後には、大学志望者と入学定員がほぼ一致する。全員入学できるのですから、政府が「十年後には大学入試を全廃する」と宣言すれば、入試はなくなる。小・中学の教育も正常化します。

入試をなくすには、それに代わる機能を果たす制度をつくること。それが奨学金です。現在のシステムは、学歴社会といいながら、実は学校歴。高校までどれだけ試験の解法をトレーニングしたかを示すにすぎません。大学でどれだけ専門的能力を習得したかを示す標識が、それに代わるべきです。それが奨学金。これは単位と違い、大学の一存で乱発できません。学校差も縮まり、教育効果の測定も出来ます。詳しいことは『中央公論』一九八九年十二月号をごらん下さい。

「変化の１年」を振り返る

さまざまな面で「変化」が語られた1993年も終わりが近づきました。「文化　批評と表現」欄もきょうが今年最後の紙面です。毎月「雑誌を読む」にご登場いただいている３人の方に、それぞれの立場から「変化の１年」を振り返ってもらいました。

「ポスト覇権」直面する日本

一九九三年は、日本の国内政治に関していえば、一九五五年体制崩壊の年である。三八年近く続いた自民党政権が、野に下り、細川政権が誕生した。細川政権がいつまで続くかは、依然としてはっきりしないが、日本の国内政治が質的な転換を遂げつつあることは間違いないようである。

この変化は、直接的には自民党内部の対立抗争、とりわけ竹下派内部での対立抗争によって引き起こされた側面が大きい。金丸問題に端を発し竹下派が分裂しなければ、そして後に新生党となる羽田グループが内閣不信任案に賛成しなければ、今回の政権交代は有り得なかったからである。この自民党内の動きと、いつまで続くか分からない金権腐敗への世論の不満が、テレビ・メディアを通すことで、相乗効果を生み、七月選挙後の政権交代につながった。

しかし、一歩引き下がってみれば、一九五五年体制の終焉（しゅうえん）は、一九八〇年代後半からの国際関係の激変という背景を抜きにしては、理解しえない。アメリカの圧倒的影響力が後退する中で冷戦が終焉したということ、「ポスト覇権」の過程の中で、「ポスト冷戦」の時代に突入したというこの時代背景が重要だと思う。「ポスト覇権」の世界とは、アメリカの地位が相対的に低下する時代であるとともに、日本の相対的影響力が重要になる時代でもある。日本が、今までのような消極的な立場でいることは、それ自体が世界を不安定化させる可能性をもつようになった。

他方、「冷戦の終焉」は、マルクス・レーニン主義のイデオロギーが、自由民主主義の前に、思想家の頭の中ではともかく、現実的には決定的敗北を遂げたことを意味した。ソ連解体によって、西側にとっての最大の安全保障上の脅威も無くなった。

「ポスト覇権」の時代状況は、日本政治においては、七月選挙における社会党の歴史的敗北となって現れたと思う。日本の役割がこれだけ大きくなった時代に、社会党は、一九九二年のPKO協力法などにおける硬直した反応に見られたように、何ら積極的なビジョンを示すことができなかった。

「ポスト冷戦」の時代状況は、七月選挙における、日本新党や新生党などの躍進となって現れた。冷戦の枠組みが消滅してみれば、反共であるというだけの理由から自民党を支持する必要はない。新しい国際社会における政策ビジョンにおいても、とりわけ自民党が優れていたわけではないし、「ポスト覇権」状況に相応（ふさわ）しい、方向性を持った政治が、自民党ならできるというわけでもない。とすれば、社会党がだめだからといって、自民党に入れる必要はなくなったのであった。

現在の日本政治は、すなわち、地球的な相互依存が進むなかでの「ポスト覇権」と「ポスト冷戦」という時代状況に、いかなる回答を出すかという問題に迫られているのである。その意味で、この課題は、日本だけが直面している課題ではない。欧州も、ロシアも、そしてアメリカもこの課題に直面している。一九九三年を振り返ってみると、その中では、アメリカが、依然として一番の対応能力を示したといえるのではないだろうか。

今年の国際関係で最重要の出来事は、ウルグアイ・ラウンドの合意である。北米自由貿易協定の議会通過、APEC首脳会議の開催、そしてウルグアイ・ラウンドの合意への一連の動きは、薄氷を踏む思いではあったにせよ、やはりクリントン政権の功績といわなければならない。この業績は、現在のところ、日本のメディアではそれほど高く評価されていないようだが、これが失敗していた時のことを考えてみれば、その重要度がはっきりすると思う。「ポスト覇権」の世界においても、「自由貿易」の原則が守られたことの意味は極めて大きい。日本は、この新しい秩序作りに、いまだに十分参加したとはいえない。われわれが見たのは、芸術的ともいえる「外圧」利用による国内課題の調整というプロセスであった。（東京大助教授・国際関係論）

田中　明彦氏

「アジア」とどう向き合うか

今年は突然の、皇太子妃決定のニュースで幕を開けた。ハーバードとオックスフォードで学んだ才媛（さいえん）で現役の外交官。エリツィン大統領とクリントン大統領の間に坐（すわ）っても堂々としている雅子さんの姿を、頼もしく思ったのは私ばかりではないだろう。

角界には初の外国人横綱、曙も誕生した。同じハワイの出身で、日本へ帰化して後進を育てた東関親方の夢が実現した。Jリーグも若者を中心に熱狂的な支持を集め、多くの外国人スター選手がスタンドを沸かせた。

しめくくりはAPEC（アジア太平洋経済協力閣僚会議）。クリントン大統領の肝いりで、米中日をはじめ各国の首脳がずらりと顔をそろえ、躍進する東アジア経済のエネルギーを感じさせた。

こうして見ると、この一年で着実に日本の国際化が前進していることがわかる。かつて外国は、遠いあこがれの対象でしかなかった。しかしいまや、外国体験が日常化しつつある。肩ひじを張らない日々の暮らしのなかに、外国とのつながりが、大げさでなくとも着実に入りこんできている。

今年の暮れ、韓国と日本は相次いでコメの市場開放受け入れを発表した。足かけ七年におよぶウルグアイ・ラウンド（新多角的貿易交渉）決着のひとこまである。

痛みをともなった譲歩だったが、日本がここから得るものは大きい。日本がいつまでも国内事情を優先させていることの象徴みたいになっていた、コメ輸入禁止の看板をやっとおろせたことで、自由貿易にコミットしていく姿勢をなんとか打ち出すこともできた。ある推計によれば、ウルグアイ・ラウンドの成功で、十年後に日本の国内総生産は約四百億ドルも押し上げられるという。冷戦後の国際関係は各国経済がますます緊密に一体化していくプロセスでもある。日本もそうした国際環境に適応し、足場を固めていくしかないのだ。

冷戦後の新世界秩序がどのようなものであるかは、まだ模索の最中である。しかしその底流にあるものは、次第にはっきりしてきたように思う。平成不況が長引いているのも、日本経済が成熟した証拠であり、新世界秩序のなかで日本が占めるべき位置がイメージできないでいるということでもある。

いっぽう中国を先頭とする東アジア経済の興隆はいよいよ本格的なものとなり、新世界秩序の一角をかたちづくることが明らかになった。アメリカがAPECの枠を借りて中国との関係改善をはかっているのも、中国の将来の発展をみこして、日本・中国との関係を再調整しておこうとする配慮にもとづくものだ。

世界史を振り返ってみると、国際社会の主役の交替は、思いのほかに急速である。今世紀初頭のアメリカの勃興（ぼっこう）、ソ連計画経済の発展と没落、戦後日本の成功……。実物経済のレヴェルで、中国は日本とすでに肩を並べつつある。追う立場にあることに慣れてきた日本は、東アジア経済の興隆が本格化するにつれ、追われる立場のむずかしさを実感させられるようになった。

こうした国際環境の変化は、日本にとって多少居心地の悪いところがある。それはひとつは、日本が脱亜入欧を掲げ、アジアを軽視してきたからだ。また、アジアを舞台に日本がひき起こした戦争に、きちんと向き合っていないからだ。

アジアは文化的に多様である。経済関係が密接になったからと言って、ECのようにすぐ地域統合が日程にのぼるわけもない。この地域のため日本は何ができるかという辺りから、考え始めるしかないだろう。

目と鼻の先には北朝鮮もある。ミサイルの射程を千二百キロに延ばそうと懸命だが、それは標的が日本だということだ。実際ミサイルが数年以内に飛んでくる可能性も10%はあると思うが、そうなったら、予想外の展開にうろたえる日本の世論が目に見えるようだ。

アジアに垣根を閉じてヨーロッパのほうを向き、都合のよいところだけをつまんできた日本。これからは、身近なアジアを外国として発見していく時代がやってくる。（東京工業大助教授・社会学）

橋爪大三郎氏

まじめに「暮らし」考える時

今月十五日に質屋の取材に行くと「忙しいからまたにして。今日は年金の受給日で、みんな受け出しに来るんだから」と断られた。乏しい年金で、借りたわずかばかりの金を返しにくる。こうした風景を見ると、マスコミの「金持ち日本」だの「一国の繁栄は許されない」などという言葉は色あせてくる。

経済とはシンプルなもので、好況のときは大手がもうかり、不況になればまず小売店や下請けやパートからつらくなる。私の知り合いも指名解雇された。保育園では仕事のなくなった父親とバトンタッチして、パートのお母さんががんばって正社員の職を探した。

だけど不況だ不況だ、だから規制緩和だ、消費税の増税だ、という論には同調しがたい。あのバブルが異常だったのだ。

バブルがはじけたおかげでタクシーは乗りやすくなった。お父さんは家に早く帰る。外食費も浮く。デパートもスーパーもバカ高い値がつけられず、イイモノが安くなっている。子連れで旅に出ると、鼻もひっかけてもらえなかったのに、いまや温泉宿が〝お子様ご優待券〟を送ってくる。眺望をさえぎる駅ビル計画も宙に浮いたままだ。

首切りや賃金カットは困るが、ある意味では〝暮らしやすく〟なった。

そして地球規模の環境、あるいは地域という身の回りのことを考えても、これ以上、資源を無駄遣いし、ゴミを出す一方の〝消費生活〟は先がない、ということはじわじわと身にしみはじめている。たとえば質屋さんや古物商やバザーが流行るのも地域の中のリサイクルだ。

今年は、雨水を貯めて飲んでいる人、コンポストで生ゴミを土に返している人、山を壊してお墓をつくるのでなく自然葬を提唱している人、拡声器騒音に反対し静穏権を訴える人、身近なところでいろんな活動をしている人に出会った。すぐ会や運動団体をつくるのでなく、まず自然体で、一人でもはじめてしまうのが流行りらしい。

そういう生活の観点から「恋も人生も語る、育児も家事も考える」「夢と文化性を持つ」政治は考えられないか。これは「いま面白く『政治する』法――『思想の場末』からの提案」（「世界」一月号）で小児科医の毛利子来さんが書いていたことばである。

地殻変動が起こっているのに、政治「改革」も税制もコメ開放も、相変わらずマスメディアでは「上から」語られた。「政治力の回復」というのはかけひきに熟達することや、権力的な決断を示すことではなく、権力を指向しないで、これからの暮らしのありようを、みんなで考えることではないか。

たとえば「ボーダレス」とか「世界が相互依存を深めるいま」といわれても、私たちにはそうピンとはこない。別にボーダレスにしてくれと頼んだわけではない。より多くの利潤、コスト削減を求めて海外に工場を移したのは大企業である。大豆や小麦は輸入に頼り、炭鉱をつぶして石油に変えたのは政権党の政策である。ピンとこないうちに、農業も町工場も小売店も「ボーダレスの時代なんだからもういらない」と生活様式を否定されたら反発しても当然だ。

知人が「コメの輸入はいいけどブレンドされるのは困るわね」といった。彼女の夫は輸出で有名な大企業につとめ、一家は生協を通じて国産大豆ニガリ作りの豆腐や特定農家と提携した無農薬米を食べている。結局ミス・ミナコ流にいうとコメ開放も、彼ら「ボーダレス」の余慶にあずかるアッパーな人々はおいしく安全なコメを食べ、ロウワーな私たちがタイ米を食べ、安いインド綿の服を着るということではないの？

今年は筒井康隆氏の断筆宣言はじめ、「言論の自由」も話題になった年だった。しかしもう一つ、こうした暮らしのありようを考えるため、まじめに率直に意見を言おうとすると「シャミン」「守旧派」「指導者気取り」「台所感覚」などとレッテルを貼って口封じするのも、言論の自由への脅威であるように感じられた。（地域雑誌「谷中・根津・千駄木」編集者）

森　まゆみ氏